

臼杵市所在

戸室石丁場跡 1

－双葉南地区急傾斜地崩壊対策事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(1)－

2025

大分県立埋蔵文化財センター

白 杵 市 所 在

と　　むろ　　いし　　ちょう　　ば　　あと
戸 室 石 丁 場 跡 1

－ 双葉南地区急傾斜地崩壊対策事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(1)－

2 0 2 5

大分県立埋蔵文化財センター

序 文

本書は、双葉南地区急傾斜地崩壊対策事業に伴い、大分県教育委員会が大分県土木建築部臼杵土木事務所の依頼を受けて実施した、戸室石丁場跡第1次から第3次調査の発掘調査報告書です。

戸室石丁場跡は、臼杵市街地西方に聳える水ヶ城山から東へ張り出した、戸室台・浄光台と呼ばれる台地の南縁斜面、約9万年前の阿蘇山噴火によって形成された溶結凝灰岩の切り立った崖面に所在します。

発掘調査の結果、この崖面において臼杵藩稲葉家の家紋「隅切折敷三字文」の刻印や、「文化十二年」・「明治二年」等の刻銘、石材の採取痕跡とみられる階段状の岩盤面等を検出しました。特に、臼杵藩稲葉家の家紋をもつことから、藩の公用に用いる石材を供給した場所であるとみられ、かつ、刻銘から採石年代を把握することのできる重要な遺跡であることが分かりました。こうした成果を受けて、事業者の御理解と御協力をいただき、確認された刻印や刻銘は部分的ではありますが、可能な限り現地で保存することができました。本書が、埋蔵文化財の保護とその啓発とともに、学術研究の一助として活用できれば幸いです。

最後に、発掘調査の実施にあたり多大な御支援・御協力をいただきました関係各位に対し、衷心から感謝申し上げます。

令和7年3月31日

大分県立埋蔵文化財センター
所 長 後 藤 晃 一

例 言

- 1 本書は大分県臼杵市大字戸室に所在する、戸室石丁場跡(第1～3次調査)の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は双葉南地区急傾斜地崩壊対策事業に伴い、大分県土木建築部臼杵土木事務所の依頼を受け、大分県立埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 第1～3次発掘調査は令和元年度～令和3年度に実施した。発掘調査の期間及び調査担当者は下記のとおりである。
第1次調査 調査期間：令和元年12月9日～令和2年3月6日
調査担当：友岡信彦（大分県立埋蔵文化財センター参事兼調査第一課長）
横澤 慈（同 調査第一課主査）
第2次調査 調査期間：令和2年11月30日～令和3年3月24日
調査担当：横澤 慈（大分県立埋蔵文化財センター調査第一課副主幹）
第3次調査 調査期間：令和3年9月27日～令和3年10月13日
調査担当：横澤 慈（大分県立埋蔵文化財センター調査第一課副主幹）
- 4 発掘調査の実施にあたり、石切場崖面の三次元点群測量を九州建設コンサルタント株式会社に委託した。その他の遺構実測図や拓本、及び記録写真撮影等調査記録の作成は友岡・横澤が行った。
- 5 第1～3次調査の出土品整理作業は令和2～4年度に実施し、株式会社九州文化財総合研究所に委託した。発掘調査報告書の作成業務は令和6年度に実施し、大分県立埋蔵文化財センター調査第一課長 横澤 慈が担当した。
- 6 発掘調査に係る実測図や写真、三次元測量データ等調査記録、出土遺物は大分県立埋蔵文化財センター（大分市牧緑町1番61号）で保管している。
- 7 発掘調査の実施及び発掘調査報告書の作成にあたり、以下の方々から多大な御協力、御指導を賜った（所属は調査当時）。
（機関等）大分県土木建築部臼杵土木事務所、株式会社豊産業、ダイヤ興産株式会社、神田建設工学株式会社、臼杵市教育委員会、戸室地区自治会
（個人）神田高士（臼杵市教育委員会）、平川 毅・井 大樹（大分県立歴史博物館）、吉田 寛・植田紘正（大分県立埋蔵文化財センター）
- 8 本書の執筆・編集は横澤が行った。

目 次

第1章 調査に至る経緯と発掘調査の経過	1
第1節 調査に至る経緯.....	1
第2節 発掘調査の経過.....	3
第3節 整理作業・報告書作成の経過.....	4
第4節 調査組織の構成.....	4
第2章 遺跡の位置と環境	6
第1節 地理的環境.....	6
第2節 歴史的環境.....	6
第3章 第1次発掘調査の成果	8
第1節 本発掘調査の方法.....	8
第2節 三次元測量調査の成果.....	12
第3節 発掘調査の成果.....	14
第4節 出土遺物.....	17
第4章 第2次発掘調査の成果	28
第1節 三次元測量調査の成果.....	28
第2節 発掘調査の成果.....	30
第3節 出土遺物.....	31
第5章 第3次発掘調査の成果	47
第1節 三次元測量調査の成果.....	47
第2節 発掘調査の成果.....	51
第3節 出土遺物.....	52
第6章 総括	63
第1節 戸室石丁場跡の採石年代と採石の体制.....	63
第2節 戸室石丁場跡での石材採取とその用途について.....	64
第3節 遺跡の評価.....	66
添付DVDについて.....	67

写真図版

報告書抄録

插图目次

第1図	戸室石丁場跡位置図……………	1	第29図	第2次調査3区平面・断面図……………	31
第2図	分布調査で把握した戸室石丁場跡の 遺構全体分布……………	2	第30図	第2次調査1区出土遺物実測図①……………	32
第3図	戸室石丁場跡第1次調査地の遺構分布と 保存に向けたゾーニング……………	3	第31図	第2次調査1区出土遺物実測図②……………	33
第4図	戸室石丁場跡と周辺の遺跡……………	7	第32図	第2次調査1区出土遺物実測図③……………	34
第5図	第1次調査の調査区配置……………	8	第33図	第2次調査1区出土遺物実測図④……………	35
第6図	第1次調査1区三次元測量図……………	9	第34図	第2次調査1区出土遺物実測図⑤……………	36
第7図	第1次調査2～4区三次元測量図……………	10	第35図	第2次調査1区出土遺物実測図⑥……………	37
第8図	第1次調査刻印・刻銘拓影①……………	11	第36図	第2次調査1区出土遺物実測図⑦……………	38
第9図	第1次調査刻印・刻銘拓影②……………	12	第37図	第2次調査1区出土遺物実測図⑧……………	39
第10図	第1次調査1区矢穴列……………	13	第38図	第2次調査2区出土遺物実測図①……………	40
第11図	第1次調査1A区平面・断面図……………	14	第39図	第2次調査2区出土遺物実測図②……………	41
第12図	1区祠状遺構実測図……………	15	第40図	第2次調査2区出土遺物実測図③……………	42
第13図	第1次調査2区平面・断面図……………	16	第41図	第2次調査2区出土遺物実測図④……………	43
第14図	第1次調査2区土層断面図……………	17	第42図	第2次調査3区出土遺物実測図①……………	44
第15図	第1次調査1A区出土遺物実測図①……………	18	第43図	第2次調査3区出土遺物実測図②……………	45
第16図	第1次調査1A区出土遺物実測図②……………	19	第44図	第2次調査3区出土遺物実測図③……………	46
第17図	第1次調査1A区出土遺物実測図③……………	20	第45図	第3次調査の調査区配置……………	47
第18図	第1次調査1A区出土遺物実測図④……………	21	第46図	第3次調査三次元測量図……………	48
第19図	第1次調査1B区出土遺物実測図……………	22	第47図	第3次調査刻印・刻銘拓影①……………	49
第20図	第1次調査2区出土遺物実測図①……………	23	第48図	第3次調査刻印・刻銘拓影②……………	50
第21図	第1次調査2区出土遺物実測図②……………	24	第49図	第3次調査2区平面・断面図……………	51
第22図	第1次調査2区出土遺物実測図③……………	25	第50図	第3次調査2区ノミ痕拓影……………	52
第23図	第1次調査2区出土遺物実測図④……………	26	第51図	第3次調査出土遺物実測図①……………	53
第24図	第1次調査3区出土遺物実測図……………	27	第52図	第3次調査出土遺物実測図②……………	54
第25図	第2次調査の調査区配置……………	28	第53図	第3次調査出土遺物実測図③……………	55
第26図	第2次調査三次元測量図……………	29	第54図	第3次調査出土遺物実測図④……………	56
第27図	第2次調査刻印拓影……………	29	第55図	第3次調査2区の採石痕跡……………	64
第28図	第2次調査1区平面・断面図……………	30	第56図	溝切技法……………	65
			第57図	第1次調査1区刻印12上の 溝切技法の痕跡……………	66

表目次

第1表	戸室石丁場跡の発掘調査に係る 法定手続等……………	3	第7表	第2次調査土製品観察表……………	61
第2表	第1次調査土器・陶磁器・ ガラス器観察表……………	57	第8表	第2次調査石製品観察表……………	61
第3表	第1次調査瓦類観察表……………	59	第9表	第2次調査金属製品観察表……………	62
第4表	第1次調査石製品・骨製品観察表……………	59	第10表	第3次調査土器・陶磁器・ ガラス器観察表……………	62
第5表	第2次調査土器・陶磁器・ ガラス器観察表……………	60	第11表	第3次調査瓦類観察表……………	62
第6表	第2次調査瓦類観察表……………	61	第12表	第3次調査土製品観察表……………	62
			第13表	第3次調査石製品観察表……………	62

図版目次

図版1	第1次調査1区調査地全景 第1次調査1A区調査地全景 第1次調査2・3区調査地全景 第1次調査4区調査地全景 第1次調査三次元測量実施状況 第1次調査刻印等記録調査状況 第1次調査刻印等拓本採取状況 第1次調査刻印・「文化十二年」刻銘等	図版4	第1次調査出土遺物
図版2	第1次調査刻印・刻銘1・2 第1次調査刻印6・7 第1次調査刻銘3 第1次調査刻銘5 第1次調査刻銘9 第1次調査刻銘8 第1次調査刻印12 第1次調査矢欠列	図版5	第2次調査地全景 第2次調査地壁面 第2次調査刻印 第2次調査1区全景 第2次調査1区池跡 第2次調査2区 第2次調査3区全景 第2次調査3区岩盤壁面
図版3	第1次調査1A区全景（南から） 第1次調査1A区全景（北から） 第1次調査1A区土層断面 第1次調査1A区祠状遺構 第1次調査2区南側全景 第1次調査2区北側全景 第1次調査2区SD1 第1次調査2区土層及びSX2	図版6	第2次調査出土遺物
		図版7	第3次調査地全景 第3次調査刻印・刻銘箇所 第3次調査刻銘2・3 第3次調査刻印・刻銘4 第3次調査刻印・刻銘6・7 第3次調査刻銘5 第3次調査刻銘8 第3次調査刻銘9
		図版8	第3次調査1区全景 第3次調査2区全景 第3次調査2区段状切り出し面 第3次調査2区岩盤表面のノミ痕 第3次調査出土遺物

第1章 調査に至る経緯と発掘調査の経過

第1節 調査に至る経緯

大分県は九州の北東部、北は瀬戸内海、東は豊後水道に面し、西部から南部にかけては九州山地に連なる山岳地帯が続き、豊かな自然や風土を形成している。一方、県土の約7割を山地が占め、白杵～八代間には中央構造線がはしり地帯構造の分界線となるなど複雑な地質構造を呈しており、土砂災害が発生しやすい地理的環境にある。実際に大分県では梅雨時期や台風の影響でたびたび土砂災害に見舞われ、平成29年7月の九州北部豪雨や令和6年8月の台風10号に伴う大雨等は激甚災害に指定されるほどの被害が生じた。さらに、近年の地球環境の変化による災害の頻発化・激甚化は、さらなる災害の発生を懸念させる状況にある。こうした状況を踏まえ、大分県では「安心な暮らしを守る強靱な県土づくり」として土砂災害対策の推進に努めており、その一環として双葉南地区急傾斜地崩壊対策事業が実施されることとなった。

双葉南地区は臼杵市中心市街地の約1km西方、水ヶ城山から東へ派生する台地状地形の南端に形成された崖面に所在し（第1図）、この一帯が急傾斜地崩壊危険区域に指定されている。当該崖面は周知の埋蔵文化財包蔵地である戸室台遺跡（縄文・弥生時代の包蔵地）の南縁部に該当するが、平成20年頃にこの崖面に近世の石丁場跡が存在することが明らかとなった。しかし、石丁場跡については研究会でその概要が報告された¹⁾程度で、必ずしも広く周知されたとはいえない状況にあった。そのようななかで急傾斜地崩壊危険区域の対策事業が計画されたのは平成20年代中頃のことである。計画を受け埋蔵文化財分布調査を実施したが、工事実施に問題ないとの判断されていた。令和元年11月に臼杵土木事務所が事業実施に先立ち開催した地元説明会において、参加者から一帯が近世の石丁場跡であるとの指摘があった。また、臼杵土木事務所から文化財保護法第94条に基づく埋蔵文化財発掘の通知が臼杵市教育委員会へ提出されたことを受け、市教育委員会から臼杵土木事務所へ当該崖面の石丁場跡について詳細な測量を含む発掘調査が必要である旨の連絡があった。これを受けて臼杵土木事務所から大分県立埋蔵文化財センターへ埋蔵文化財調査について相談があり、再度現地確認を行うことを伝えるとともに、本調査の実施を含めた埋蔵文化財の取扱いに係る協議依頼文書を臼杵土木事務所へ提出した。

令和元年11月18日に、臼杵土木事務所と埋蔵文化財センターが現地確認を実施した結果、事業対象地一帯に白



第1図 戸室石丁場跡位置図（1/8,000）

1) 神田高士2010「近世臼杵の石丁場」『近世城郭の石切丁場と石工－北部九州を中心として－』、おおい石造文化研究会

杵藩稲葉家の家紋「隅切折敷三字文」の刻印をはじめ、「文化十二年」の刻銘等が各所で確認された（第2図）。白杵藩稲葉家の家紋を持つことから公的な石丁場の可能性が高く、また紀年銘から採石時期を特定し得る極めて重要な遺跡であると判断され、現状保存を含めた埋蔵文化財の保護についての検討を依頼した。しかし、崖面壁面には良好な石質の箇所がある一方で、無数のクラックが入り崩壊の危険がある箇所も認められ、また樹木根によって辛うじて支えられた状態の巨石も認められるなど、対策の必要性も理解できる状況もあり、それを踏まえ施工範囲をA：石質が良好で刻印や刻銘が認められる特に重要な箇所、現状保存が望ましい範囲、B：刻印や刻銘



第2図 分布調査で把握した戸室石丁場跡の全体遺構分布（1／1,500）



第3図 戸室石丁場跡第1次調査地の遺構分布と保存に向けたゾーニング (1/1,000)

が認められないが良好な石質の面が残し、可能な限り保存が必要な範囲（未確認の刻印・刻銘が発見される可能性あり）、C：刻印・刻銘が認められない上に面も粗く、危険防止の観点から対策もやむを得ない範囲、の3つに区分した(第3図)。11月28日には臼杵土木事務所と再度現地協議を行い、改めて遺跡の一部現状保存の可能性を探ったものの、対策の必要性から保存が可能な範囲は刻印・刻銘の箇所程度との見解を示され、結論は持ち越された。協議を重ねた結果、法的には急傾斜地の対策が不可欠であり、面的な遺跡の保存は困難であること、しかし遺跡の重要性に鑑み、刻印や刻銘のある箇所等は部分的に不施工として可能な限り現地での保存を図ること、不施工とする範囲は発掘調査結果を踏まえて協議することとし、工事発注済み箇所については令和元年度中に記録作成のための発掘調査に着手し、令和2年度以降の事業については事前に協議の上で工事に着手することとなった。

第2節 発掘調査の経過

第1次調査は、令和元年11月15日付で臼杵土木事務所から埋蔵文化財発掘調査（本調査）の実施依頼文書が提出され、協議を踏まえて本調査実施計画及び所要経費見積を回答した。発掘調査は事業対象壁面全体の三次元測量を行うとともに、擁壁や排水溝設置箇所は立会調査の対応とした。工期が限られることから三次元測量は工事側で発注し、測量や成果物の仕様は埋蔵文化財センターと協議のうえで決定すること、成果物を1部埋蔵文化財センターに提出することとした。また、刻印・刻銘は写真・拓本による記録作成を行うこととし、高所作業車は工事側から提供を受けた。三次元測量は12月9日に着手し、12月23日に刻印・刻銘の記録作業、12月27日から3月6日にかけて擁壁箇所等の発掘調査を行い、調査を完了した。

第2次調査は令和2年9月30日付で埋蔵文化財発掘調査（本調査）実施依頼の提出を受け、調査範囲や調査方法、実施期間等の調整を行い、10月30日付で実施計画及び所要経費見積を回答した。第2次調査地では事前の目視に

第1表 戸室石丁場跡の発掘調査に係る法定手続等

調査回数	調査年度	調査期間		本調査施行通知 (法第99条第1項)	埋蔵文化財発見通知 (法第100条第2項)	調査終了 報告	備考
		三次元測量	記録作成・工事立会				
第1次調査	令和元年度	R1.129～	R1.1223～R2.36	R1.124	R2.39 (22箱)	R2.39	本書所収
第2次調査	令和2年度	R2.1130～	R3.1.20～R3.3.24	R2.11.26	R3.3.25 (20箱)	R3.3.25	本書所収
第3次調査	令和3年度	R3.9.27～	R3.9.30～R3.10.13	R3.9.21	R3.10.13 (10箱)	R3.10.13	本書所収
第4次調査	令和4年度	R4.6.2～	R4.6.22	R4.5.27	R4.6.28 (3箱)	R4.74	
第5次調査	令和5年度	R5.6.5～	R5.8.25～R5.10.6	R5.6.1	R5.10.6 (3箱)	R5.10.6	

よる確認では刻印等は認められなかったが、11月30日に壁面の三次元測量を実施し、そのデータを解析する過程で、1箇所では刻印とみられるものを確認した。それを受け令和3年2月22日写真・拓本による刻印の記録作業を行うとともに、1月20日から3月24日にかけて排水溝箇所の発掘調査を行い、調査を完了した。

第3次調査は令和3年8月31日付で埋蔵文化財発掘調査（本調査）実施依頼の提出を受け、同日付で実施計画と経費見積書を回答した。9月27日に三次元測量を行うとともに、9月30日と10月5日に朝溝床掘箇所の立会調査、10月13日に刻印・刻銘の記録作業を行い、調査を完了した。令和6年度時点で、第5次調査まで完了している。この間の法定手続等は第1表に示すとおりである。

第3節 整理作業・報告書作成の経過

戸室石丁場跡第1～3次調査の出土品整理作業は令和2年度から実施した。各年度とも戸室石丁場跡を含む当該年度整理実施事業を一括して「埋蔵文化財センターが実施する埋蔵文化財発掘調査に係る整理作業委託」として発注した。業務は埋蔵文化財センター整理作業棟を作業場所とし、出土遺物の水洗、出土地点の注記、遺物接合・復元、遺物実測・拓本採取、遺物観察基礎データ作成、遺物実測原因のトレース、遺物写真撮影、及び遺物の区分けや収納等諸作業を行った。委託業務では作業工程ごとに調査担当者が完了確認を行い、作業精度の確保に努めた。報告書作成については工事最終年度に行う予定としていたが、令和6年度に工事予定がないことから、この間に既往の発掘調査成果を報告書としてまとめることで臼杵土木事務所と合意し、令和6年度に第1～3次調査の発掘調査報告書を刊行することになった。遺構・遺物実測図版の作成や原稿執筆、編集は調査担当者が行い、令和6年12月から令和7年1月に原稿を入手し、3度の校正を経て令和7年3月に本書を刊行した。

なお、戸室石丁場跡は戸室台遺跡の範囲に含まれることから、第1～5次調査については戸室台遺跡として調査してきたが、戸室台遺跡とは遺跡の年代や性格が異なることから両者は明確に区分すべきであり、報告書作成の過程で「戸室石丁場跡」として大分県教育委員会に遺跡の発見を報告した。

第4節 調査組織の構成

戸室石丁場跡第1～3次調査の発掘調査に係る調査組織は以下のとおりである。

発掘調査主体 大分県教育委員会

発掘調査機関 大分県立埋蔵文化財センター

令和元年度（第1次調査）

調査責任者 江田 豊（大分県立埋蔵文化財センター所長）

調査総括 友岡信彦（大分県立埋蔵文化財センター参事兼調査第一課長）

調査事務	松本昌浩（	同	副所長兼総務課長）
	工藤慶弘（	同	総務課専門員）
	堺井裕史（	同	総務課主事） ※11月29日まで
	池見佳輔（	同	総務課主事） ※12月2日から
調査担当	友岡信彦（	同	参事兼調査第一課長、本調査担当）
	横澤 慈（	同	調査第一課主査、本調査担当）

令和2年度（第2次調査及び第1次調査資料整理）

調査責任者 松本昌浩（大分県立埋蔵文化財センター所長）

調査総括 後藤晃一（

調査事務 稗田 淳（

	西森公誠 (	同	総務課副主幹)
	池見佳輔 (	同	総務課主事)
調査担当	横澤 慈 (	同	調査第一課副主幹、本調査及び整理作業担当)
整理作業	後藤晃一 (	同	調査第二課長兼調査第一課長、整理作業総括)
	服部真和 (	同	調査第二課主査、整理作業委託監理)

令和3年度 (第3次調査及び第2次調査資料整理)

調査責任者	松本昌浩 (大分県立埋蔵文化財センター所長)		
調査総括	後藤晃一 (	同	副所長兼調査第一課長)
調査事務	藤原邦夫 (	同	総務課長)
	西森公誠 (	同	総務課副主幹)
	池見佳輔 (	同	総務課主事)
調査担当	横澤 慈 (	同	調査第一課副主幹、本調査及び整理作業担当)
整理作業	吉田 寛 (	同	調査第二課長、整理作業総括)
	小堀嵩史 (	同	調査第二課主事、整理作業委託監理)

令和4年度 (第3次調査資料整理)

調査責任者	松本昌浩 (大分県立埋蔵文化財センター所長)		
調査総括	後藤晃一 (	同	副所長兼調査第一課長)
調査事務	藤原邦夫 (	同	総務課長)
	山田哲也 (	同	総務課主査)
	平田愛香 (	同	総務課主事)
整理作業	吉田 寛 (	同	調査第二課長、整理作業総括)
	横澤 慈 (	同	調査第一課副主幹、整理作業担当)
	小堀嵩史 (	同	調査第二課主事、整理作業委託監理)

令和6年度 (第1～3次調査報告書作成)

調査責任者	後藤晃一 (大分県立埋蔵文化財センター所長)		
調査総括	染矢和徳 (	同	参事兼調査第二課長)
調査事務	上條天明 (	同	副所長兼総務課長)
	山田哲也 (	同	総務課副主幹)
	岩男修太 (	同	総務課主事)
	平田愛香 (	同	総務課主事) ※8～9月
調査担当	横澤 慈 (	同	調査第一課長、報告書作成担当)

業務委託機関

三次元測量調査委託 九州建設コンサルタント株式会社 (主任技術者 田中 誠) ※令和元～3年度
 整理作業委託 株式会社九州文化財総合研究所 (整理作業指導員 永井美香) ※令和2～4年度

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

戸室石丁場跡の所在する臼杵市は、大分県の東部に位置し、東は豊後水道に面し、残る三方は樺木山や九六位山、冠岳、基盤ヶ岳、姫岳、鎮南山等の標高400～700m級の丘陵を取り囲み、北は大分市、西は豊後大野市、南は津久見市、佐伯市と市境をなしている。臼杵市の面積は291.08km²、人口は令和6年12月1日現在で33,348人である。

地形的には大分県中部を東西にはしる臼杵～八代構造線に位置する。地質は後期白亜紀に形成された礫層の大野川層群を基盤とし、その上に約9万年前の阿蘇山噴火によって形成された火砕流堆積層である溶結凝灰岩が堆積する。市内の各所でこの阿蘇溶結凝灰岩の切り立った崖面が認められ、戸室石丁場跡もこうした崖面のひとつである。平地は少なく、臼杵湾に注ぎ込む臼杵川や末広川、熊崎川の流域に谷底平野が広がり、下流域に沖積平野を形成している。気候は瀬戸内気候区と南海気候区の遷移域に属し、温暖である。

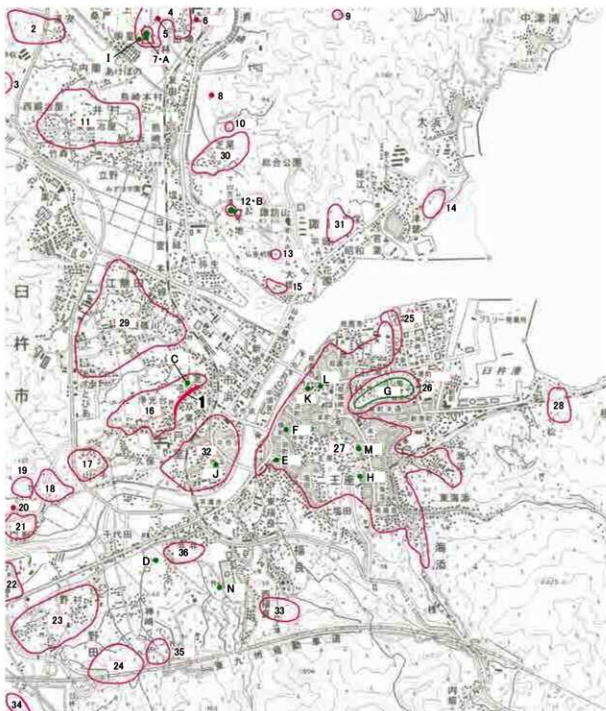
産業は農業・漁業といった第一次産業に加え、造船業や醸造業も盛んである。また、国宝・特別史跡の臼杵磨崖仏や臼杵城とその城下町を核とした観光業も行われている。交通はJR日豊本線や東九州自動車道に加え、大分から臼杵を経て津久見へ抜ける国道217号、臼杵から野津を経て竹田方面へ抜ける国道502号、臼杵市と大分市東部の坂ノ市を結ぶ県道臼杵坂ノ市線（大分県道第205号）等が主要幹線となっている。また、臼杵から豊後水道を渡って愛媛県八幡浜市との間を結ぶフェリー航路も重要な足となっている。

第2節 歴史的環境

戸室石丁場跡周辺で確認される考古資料で最も古いものは縄文時代早期である。臼杵城跡からは数点の押型文土器や無文土器が出土している他、戸室台遺跡や田篠台遺跡では古くから土器や石器が採集されている。弥生時代の遺跡は臼杵川を少しさかのぼった所に位置する野村台遺跡で、堅穴建物や貯蔵穴、環溝が調査されている。古墳時代では臼杵川河口部北岸の諏訪山丘陵に前方後円墳の下山古墳が築かれる。下山古墳と、その北方にある白塚古墳は石甲を伴うことで知られ、白塚古墳の石甲は国の重要文化財に指定されている。古代になると、臼杵地域には荘園として臼杵荘が成立する。臼杵川をさかのぼった深田・中尾地区では平安時代末頃に臼杵磨崖仏が造られ、山王石仏横の丘陵上には嘉応2年（1170）と承安2年（1172）の紀年銘をもつ石形成の五輪塔がある。この2基の五輪塔は紀年銘を持つ石造五輪塔としては岩手県平泉町の中尊寺観音院にある仁安4年（1169）銘の五輪塔に次いで古いものである。同じ頃に、野村台遺跡では臼杵荘の荘所の可能性が指摘される溝状遺構が形成されている。

臼杵荘を在地領主として管理・開発したとされるのが、豊後大神氏に連なる大神系臼杵氏である。しかし、文治2年（1186）の臼杵推隆追放により大神系臼杵氏の支配は終焉し、執権北条氏もとて地頭による支配を経て、14世紀後半頃には豊後守護の太田氏が臼杵荘を領有する。臼杵には太田時直が入って臼杵氏を名乗り、以降太田系臼杵氏の領有が続く。弘治2年（1556）には太田義直（のちの宗麟）が丹生島城に築城して臼杵に拠点を移し、16世紀後半の臼杵は南蛮貿易の拠点のひとつとして繁栄した。この時期の遺跡として、戸室台遺跡では太田氏あるいはその家臣の館とみられる遺構が確認され、また台地上には太田氏15代親筆・第16代親政の墓塔が所在する。田篠台遺跡では臼杵氏の屋敷の可能性のある遺構が確認されている。しかし、天正14年（1586）に島津氏の侵襲により、太田宗麟の籠った丹生島城は落城こそ免れたものの城下は壊滅的な被害を受けた。文禄2年（1593）には太田吉統は朝鮮出兵での失態を咎められて豊後を除国され、臼杵には豊臣系大名の福原直高が、次いで慶長2年（1597）には太田一吉が入封する。この福原・太田氏の段階で、臼杵城は近世城郭へと変貌を遂げたとみられている。

慶長5年（1600）の関ヶ原の合戦後、臼杵には稲葉貞通が5万石で入封し、明治4年（1871）の廃藩置県まで稲葉氏が臼杵を統治する。稲葉氏の治世で臼杵城の本丸・二の丸塁線は総石垣化し、城下の整備も行われた。明治10年（1877）に勃発した西南戦争では、旧臼杵士族が結成した臼杵隊は政府軍につき臼杵城に籠城したものの、薩軍奇兵隊の攻撃により落城している。この戦いの際に構築された陣地跡が、諏訪山から井村・野田などにかけて確認されている。



- | | | | | |
|----------|----------|------------|-----------|------------|
| 1 戸室石丁場跡 | 2 道安遺跡 | 3 坊主山遺跡 | 4 三重野遺跡 | 5 丸山古墳 |
| 6 田崎古墳 | 7 臼塚古墳 | 8 神下山古墳 | 9 竜王山古墳 | 10 仲山遺跡 |
| 11 井村遺跡 | 12 下山古墳 | 13 諏訪山遺跡 | 14 的場山台場跡 | 15 諏訪横穴 |
| 16 戸室台遺跡 | 17 本田館跡 | 18 小中尾遺跡 | 19 海蔵寺跡 | 20 門前地下式横穴 |
| 21 内福寺跡 | 22 持田遺跡 | 23 野村台遺跡 | 24 野田遺跡 | 25 得根頭台場跡 |
| 26 臼杵城跡 | 27 臼杵城下町 | 28 琵琶ヶ鼻台場跡 | 29 田篠台遺跡 | 30 芝尾台遺跡 |
| 31 平岡台遺跡 | 32 市浜遺跡 | 33 高見寺墓地 | 34 御坪場遺跡 | 35 神崎遺跡 |
| 36 瀬井クスバ | | | | |
-
- | | | |
|------------------|-----------------|-----------------|
| A 臼塚古墳 (県史跡) | B 下山古墳 (国史跡) | C 戸室一石五輪塔 (市有形) |
| D 塩石の石風呂 (県有形民俗) | E 三重塔 (県有形) | F 石敢当の塔 (市有形民俗) |
| G 臼杵城跡 (県史跡) | H 旧丸毛家住宅 (市有形) | I 石甲 (国重要文化財) |
| J 旧板井家住宅 (市有形) | K 八坂神社本殿 (県有形) | L 旧平井家住宅 (県有形) |
| M 月桂寺境内 (県史跡) | N 福川清配の墓地 (市史跡) | |
- ※臼杵城跡は令和6年12月に国史跡指定答申

第4図 戸室石丁場跡と周辺の遺跡 (大分県教育委員会発行「大分県遺跡地図」図幅56「臼杵」に加筆、1/25,000)

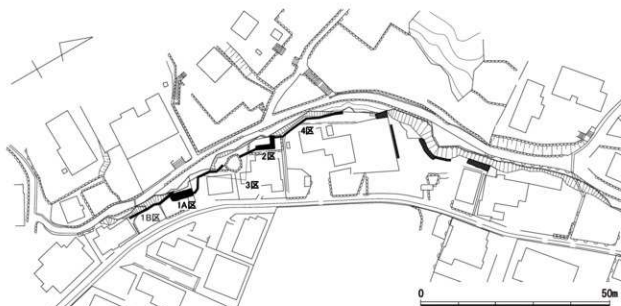
第3章 第1次発掘調査の成果

第1節 本発掘調査の方法

戸室石丁場跡の本調査対象は、主に切り立つ断崖の凝灰岩露頭壁面である。第1章でも触れたようにこの壁面に対してコンクリート吹付を行い、また部分的に擁壁を設置することから、壁面に残る採石痕跡や、壁面の石質等、情報を可能な限り記録することが求められた。また、壁面は所によっては高さ10mを超えることから、記録作成を安全に行う方法を選択する必要がある。そこで、地上レーザ型の三次元測量により壁面全体の記録作成を行うこととし、確認された刻印や刻銘、明確な採石痕跡等の遺構については個別に写真撮影や拓本採取・実測図作成による記録作成を行った。こうした遺構の有無は調査員の肉眼観察により判断したが、対象地には採石痕跡のある横方向の無数の段状の割れ痕跡や筋状の割れが認められるものの、これが採石によるものなのか、石の目が風化によって生じた自然の割れ（クラック）なのかを識別することは困難である上に、高所に残る痕跡については肉眼での観察はほぼ不可能であった。そのため、こうした判別が困難な痕跡については三次元測量により記録しておくことで、調査後にも検討できる余地を担保することとし、工期の限られる現場では確実なものの記録に止めることとした。また、擁壁や側溝の設置に伴う地中の掘削については工事立会として実施し、遺物の回収を行うとともに、遺構が確認された場合には写真及び実測図で記録作成の措置をとった。

壁面の三次元測量にあたっては、急傾斜事業で設置された基準点を利用し、トータルステーションによる測量で標定点を設置した後、対象地に地上型3Dレーザ計測機を設置して観測を行った。観測は複数方向から行って測点を重複させることで、可能な限り岩陰等で死角となる部分が生じないように努めた。取得した地形データは設置した標定点を基に合成・解析を行った。測量の計測密度は点間5cmとした。観測データは膨大であることから、オリジナルデータと共に一般的なコンピュータで動作できるサイズに編集したデータを作成した。

第1次調査は事業の全体計画延長282mに対して延長約70mで、事業対象地の約4分の1を占める。調査対象壁面は約560㎡で、地形も複雑に屈折しているため、地形や工法に応じて施工順に1区・2区・3区・4区と調査区分けを行った（第5図）。以下、三次元測量調査及び調査区ごとの発掘調査成果の概要を述べる。



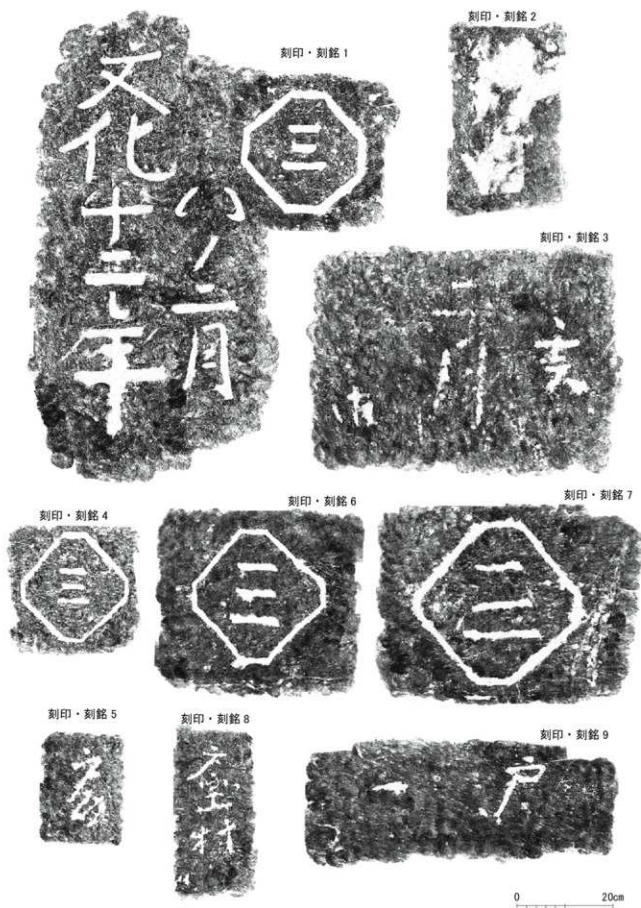
第5図 戸室石丁場跡第1次調査の調査区配置 (1/1,000)



第6図 第1次調査1区三次元測量図 (1/500・1/100)



第7図 第1次調査2～4区三次元測量図 (1/600・1/200)



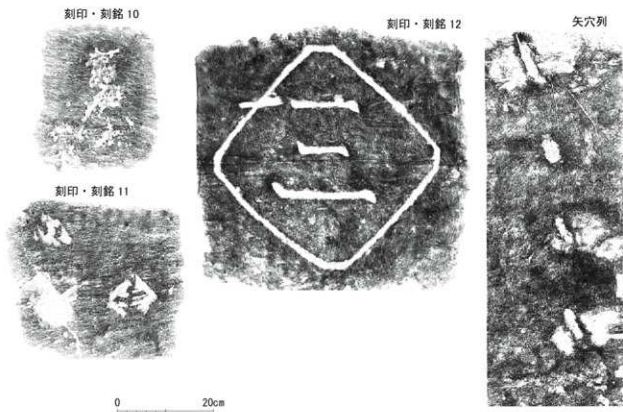
第8図 第1次調査刻印・刻銘拓影① (1/8)

第2節 三次元測量調査の成果

第1次調査は事業予定地の最も南側に位置する。1次調査地の最南端にある1区の測量図を第6図に示す。1区の壁面の高さは約6.5～8m前後を図り、上部が低い部分は石垣が積み上げられている。1区の南寄りでは1箇所に刻印や刻銘が、また南端部付近で矢穴列1条を確認している。

全体に壁面は垂直に近い角度で絶壁となっているが、刻印・刻銘のある部分の上部は88°ではほぼ垂直であるのに対し、中ほどでは79°、裾部では62°と、下に行くほど傾斜が緩くなっている。刻印・刻銘は上部の下半から中部にかけて認められる。全体的にクラックはほとんどなく、石質は良好である。3区との境目付近は角ばった岩肌を呈するが、これは近現代の加工を受けた結果によるものである。

2～4区の測量図を第7図に示す。壁面の高さは約7～10mを測り、1区と同様に垂直に近い切り立った断崖を形成している。断面角度は3区のA断面が93°、2区のB断面89°、4区のC断面が89°、4区のD断面が83°を測る。石質は全体に良好であるが、基部側は数箇所に穴蔵や防空壕の可能性のある横穴が穿たれ、近代以降の地形改変が著しい。また、北側にいくにつれ、中腹あたりに多数のクラックが入るなど、石質はやや低下する。2～4区では刻印・刻銘は確認されなかったが、1区に比べ石質が不良であることが影響しているのか、あるいはそれほど大がかりな採石が行われなかったことによるのか、はたまた後世の削平によって失われてしまったのかは判然としない。



第9図 第1次調査刻印・刻銘拓影② (1/8)

刻印・刻銘等

1区で確認された刻印・刻銘は全部で12箇所である(第8・9図)。刻印・刻銘(以下、刻と省略)1は白杵藩稲葉家の家紋である「隅切折敷三字文」の刻印と、その左に「ハノ二月/文化十二年」と刻む。「ハノ」の意味するところは不明であるが、文化十二年二月に採石したことを示すものである可能性が高い。刻2は刻1の家紋刻印のすぐ右側に位置する刻銘である。全体に表面が荒れており、かつ欠損も多く判読が難しいが「□月」のように見える。文字の残存状態から、文化十二年の刻銘よりも一段階古い刻銘である可能性が高い。刻3は刻2の下で確認された刻銘である。右側から「亥(カ?) / 二月 / □」のように読めるが、判然としない。亥と最後の不明文字は干支の可能性はあるが、決め手を欠く。全体に彫りが弱く、刻2と同様に一段階古い刻銘の可能性が高い。刻4は刻1のやや左下にある、稲葉家家紋の刻印で、1に比べると若干小振りである。刻5は刻3の下にある刻銘で、「戸室」と判読できる。刻6・7は北側に並んで彫られた稲葉家家紋の刻印である。刻8は刻5の右下やや離れた位置にある刻銘で、「戸室村」と記す。刻9は刻8の左下にある刻銘で、右から「戸/一」と判読できる。戸は戸室村の頭文字であろう。一は何を意味するのか判然としないが、戸室村の隣には「市浜村」があり、その頭文字の市と同音の一を記した可能性もある。刻10は刻8の下にある刻銘であるが、彫りが浅いうえに表面が荒れており判読できない。刻11は刻10の下にある刻印状のもので、菱形状の囲いの中に「二」字状の刻みを入れる。稲葉家家紋に似ているようにも見え、家紋を簡略化したものであろうか。その左上にあるのは近代以降の棒状のノミ痕で、文字ではない。刻12は南端部付近にある稲葉家家紋刻印で、1区の刻印の中では最大のものである。



第10図 第1次調査1区矢穴列(1/30)

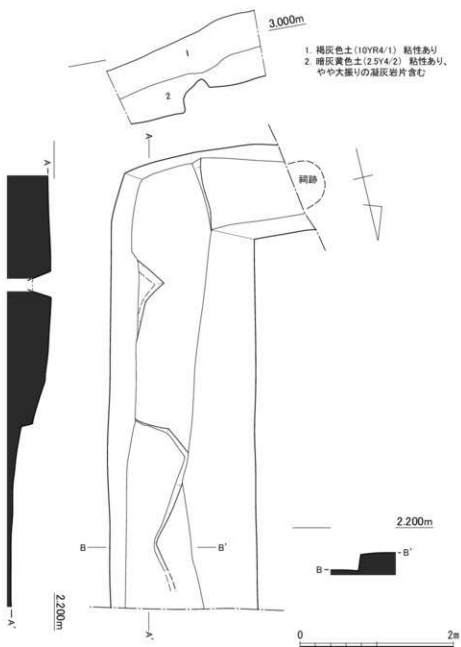
矢穴列（第10図）

刻12の右上に1条の矢穴列が認められる。矢穴は最上部が石の割れ面によって半分を欠いているが、全部で5基からなる。長さ約6～8cm、幅1.6～2cm、深さ5cmを測り、矢穴間の距離は約11～13cmである。

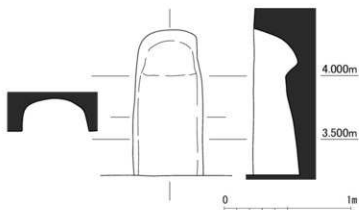
第3節 発掘調査の成果

1区の調査

1区は第1次調査の最も南に位置する調査区で、擁壁設置箇所と側溝設置箇所の1A区に分けられる。調査では1A区で検出遺構の記録作成を行った。1B区については掘削深度が浅く岩盤層に達しなかったため、検出できた遺構はなく、遺物の回収に留まった。



第11図 第1次調査1A区平面・断面図（1/50）



第12図 1区祠状遺構実測図(1/30)

1A区は逆L字形の調査区で、調査面積は約126㎡である(第11図)。堆積土層は上層の粘性のある灰褐色土と、下層はやや大振りの凝灰岩片を含む暗灰黄色土の2層に分層される。両層ともほぼ水平な堆積状態を示すが、いずれも近現代の遺物を含み明確な時期差はみられない。石丁場が廃絶した後に、しばらく岩盤が露出していたところに、近代以降に宅地化した際に土を入れて整地したものとみられる。

遺構は祠状遺構1基と、北端部中央と北半部東壁際、南半部の3箇所で凝灰岩岩盤の段状の落ち込みを検出した。北半部東壁際と南半部の落ち込みは長方形の石材を切り取ったような平面形状を呈し、段の角度は垂直に近いことから、凝灰岩の採石痕跡の可能性が高い。

祠状遺構(第12図)

調査区北西端の崖面に穿たれたもので、高さ1.14m、幅0.55m、奥行きは最大で0.36mを測る。頂部は緩やかなアーチ状を呈し、横断面奥壁側は蒲鉾形を呈する。奥壁面には円棒状工具による調整痕が無数に残る。調査前は内部に礫が充填され閉塞された状態であった。祠状遺構からの出土遺物はないが、調整痕から近代以降の構築とみられる。

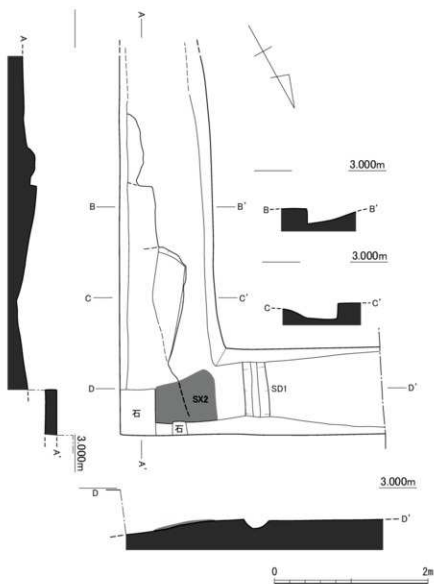
2区の調査

2区は第1次調査地のほぼ中間地点で、3区と4区に挟まれた場所にあたる。擁壁設置に伴いL字形の調査区を設定し、発掘調査を行った(第13図)。調査面積は約10㎡である。調査区の土層断面図を第14図に示す。第1層は表土層で、粘性のある褐灰色土である。堆積はほぼ水平で、層厚は0.15~0.3m前後を測る。第2層は粘性のある明褐色土で、東端部付近に部分的に堆積する。第3層は暗灰黄色土で、やや大振りの凝灰岩片が混じる。層厚は0.3~0.4m程度で、ほぼ水平な堆積状況を示す。第4層は貝殻片や細片化した土器片の混じる明黄褐色粘質土で、北東隅部岩盤上に薄く堆積する。三和土とみられ、後述するSX2に該当する。

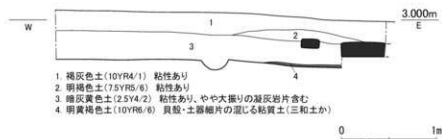
遺構は溝状遺構SD1と部分的に三和土の堆積したSX2、そのほか2箇所で凝灰岩岩盤の段状の落ち込みを検出した。この落ち込みは1A区と同様に採石痕跡の可能性が高い。

SD1

調査区の北部で検出した溝状遺構である。長さ0.75m以上、幅0.28~0.32m、深さ0.12mを測る。埋土は土層図の第3層で、底面付近から被服ボタンが1点出土した。



第13図 第1次調査2区平面・断面図 (1/50)



第14図 第1次調査2区北壁土層断面(1/40)

SX2

調査区の北東隅部付近で検出された、三和土とみられる粘質土が薄く広がる箇所である。この粘質土中には細片化した貝殻や土器片がかなりの量が出土したが、これらはSX2以外ではほとんど見られず、三和土に意図的に混和したものである可能性が高い。宅地に伴う土間の痕跡であろうか。

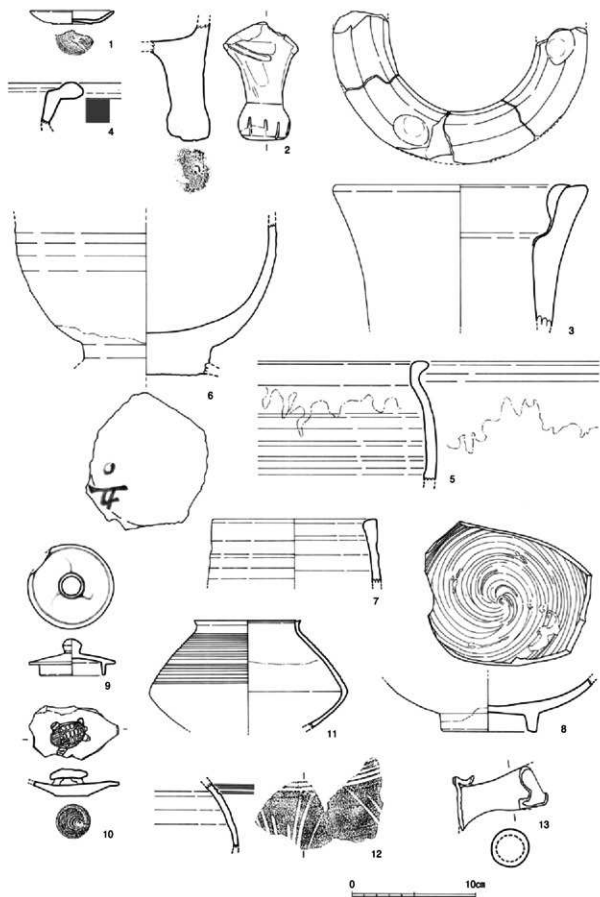
3・4区の調査

3区は1A区と2区を繋ぐ側溝、4区は2区から北へ続く側溝の設置箇所である。いずれも工事立会での調査となったが、掘削が0.5m程度と浅く、一部で岩盤を検出したものの、大部分は埋土中に収まる程度で、検出した遺構はなく、遺物の回収に留まった。

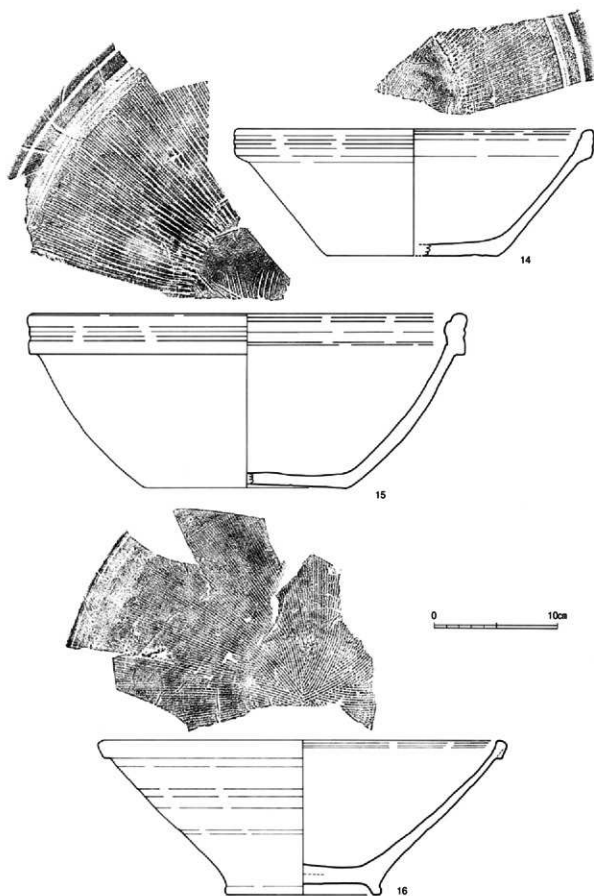
第4節 出土遺物

第1次調査の出土遺物を第15～24図に示す。第15～18図は1A区出土遺物である。1は土師器の皿で、内面には柿釉を施す。底面には回転系切り痕が残る。2・3は土師器壺口である。2は獣脚形の脚部で、裾には沈線が爪を表現する。刻印はないが白牡丹丸山焼の製品の可能性が高い。4は瓦質土器の鉢で、外面口縁下に赤色顔料を塗彩する。5は施釉陶器の甕である。6は施釉陶器の鉢で、底面には「五〇」又は「吾」の墨書がみられる。7は焼締陶器の鉢。8は施釉陶器鉢で、見込みに刷毛目文を施す。9は施釉陶器急須の蓋、10は施釉陶器土瓶蓋で、摘み部は亀形を呈する。11・12は関西系陶器の土瓶、13は関西系陶器土瓶の把手である。14～16は摺鉢で、14・15は泉州壺、16は九州系である。17は施釉陶器碗、18は陶胎染付碗である。19は紅碗か。20は染付磁器端反碗で19世紀前半、21は型紙摺捺の磁器碗で明治初年に比定される。22は染付磁器碗蓋、23は染付磁器端反碗の蓋、24は染付磁器蕎麦猪口である。25・26は染付磁器の皿で、25は18世紀代、26は近代に比定される。27・28は染付磁器鉢、29・30は染付磁器段重、31は香炉、32は御神酒徳利である。33・34は磁器瓶で同一個体である。35は磁器壺で、内面には前面に鉄分が付着する。底面には墨書が見られるが、部分的にしか残らず字は明らかにできない。36は軒丸瓦で、瓦当面は右巻き巴文である。37は結晶片岩製砥石である。38は凝灰岩製で、上面縁線を土手状に加工しているが、用途は明らかにできない。

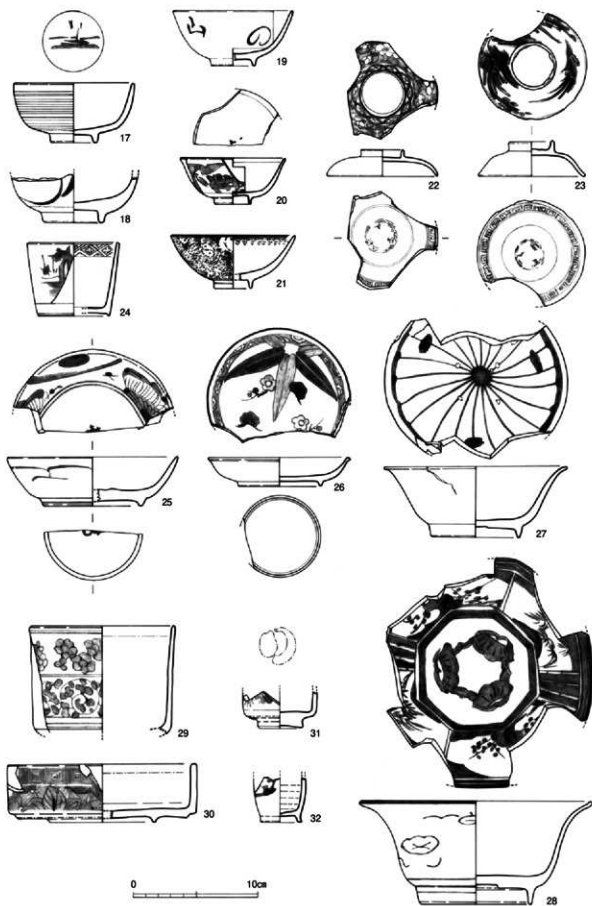
第19図は1B区出土遺物である。39～45は陶器で、39は小皿、40は関西系陶器碗、41は萩焼の鉢、42は摺鉢、43は徳利、44は急須蓋、45は土瓶蓋である。46～57は染付磁器で、46は小型の丸碗、47～49は端反碗、50は型紙刷絵の碗、51は広東碗の蓋、52は端反碗の蓋、53は土瓶、54・55は小杯、56・57は皿である。58はガラス製化粧水瓶で、底面に桃に止まるトンボのエンボスを施す。竹田市炭竈遺跡等に類例があり、桃谷順天館の白色美顔水の容器である。59はガラス製靴クリーム瓶で、外面に「コロンプス」、底面には「A/14」のエンボスを施す。



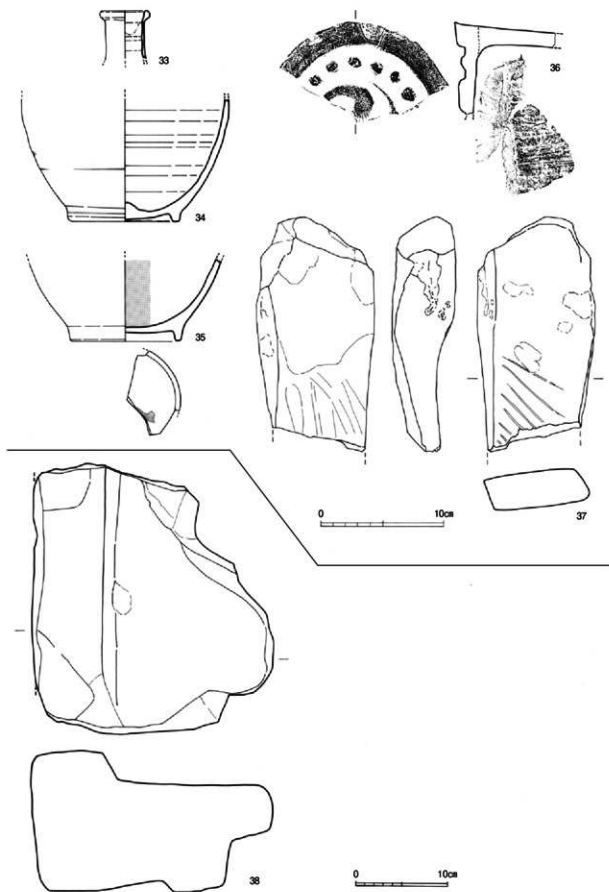
第15図 第1次調査1A区出土遺物実測図① (1/3)



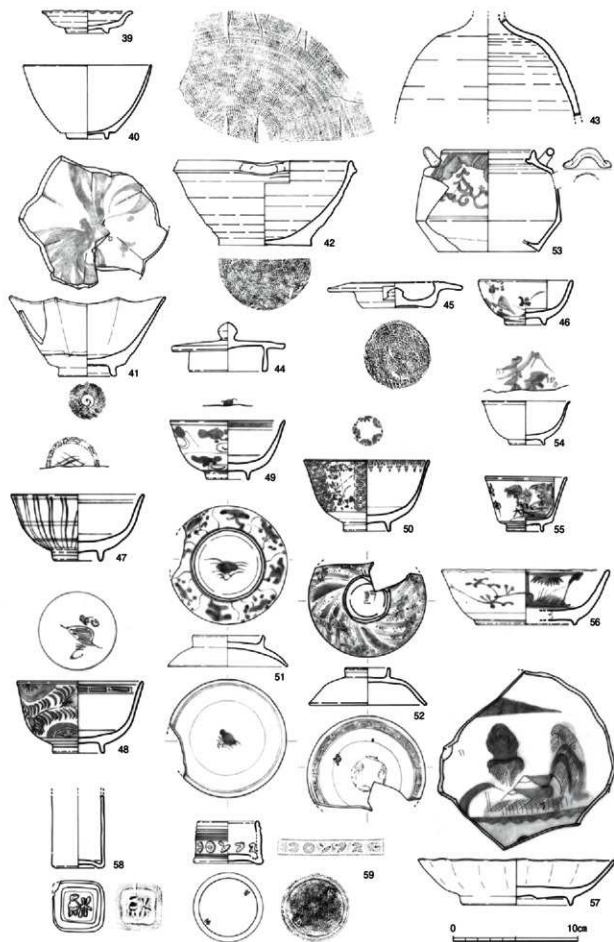
第16図 第1次調査1A区出土物実測図② (1/3)



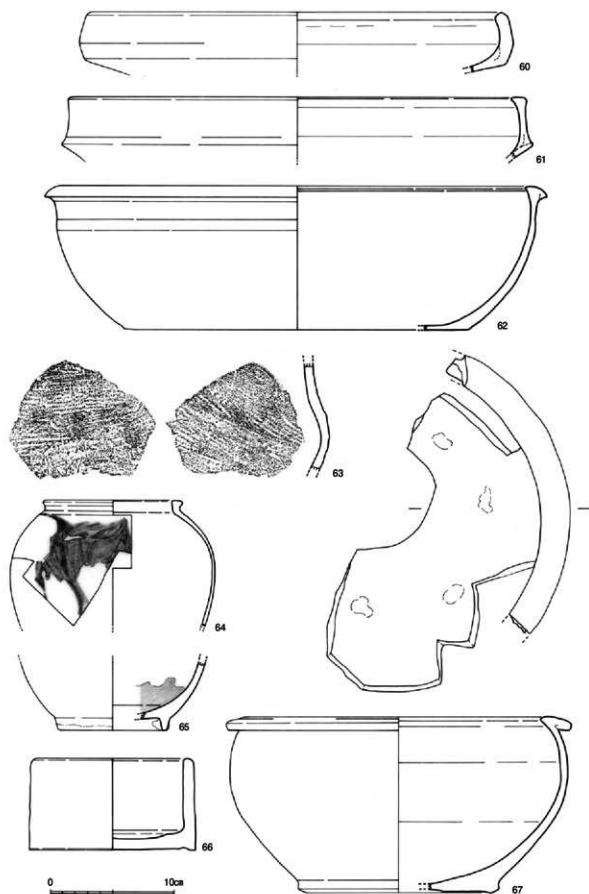
第17図 第1次調査1A区出土遺物実測図③ (1/3)



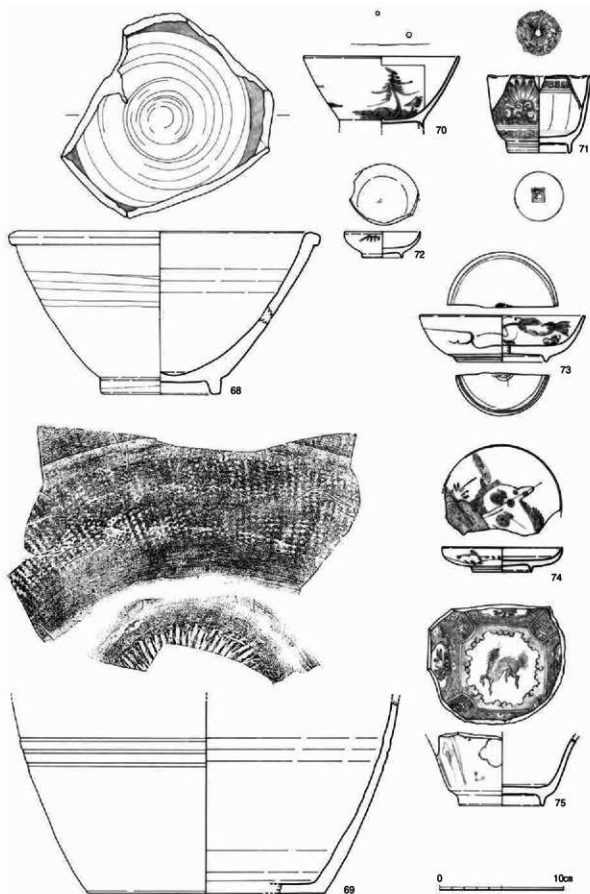
第18図 第1次調査1A区出土遺物実測図④ (1/3・1/4)



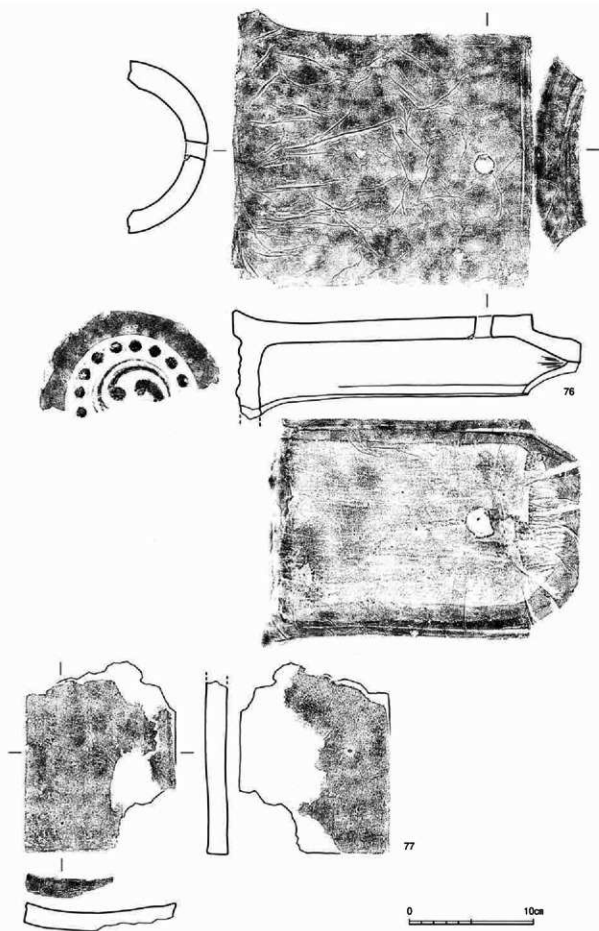
第19図 第1次調査1B区出土遺物実測図(1/3)



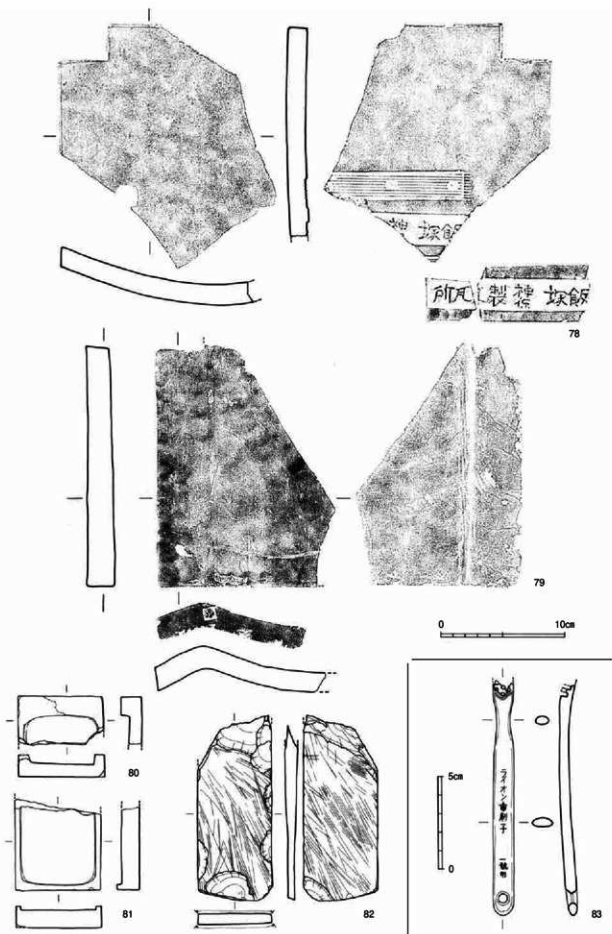
第20図 第1次調査2区出土遺物実測図① (1/3)



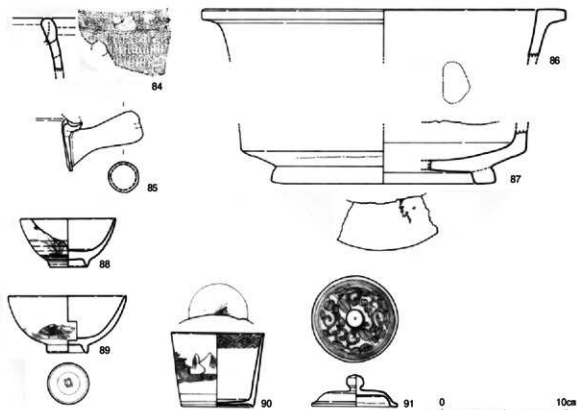
第21図 第1次調査2区出土遺物実測図②(1/3)



第22図 第1次調査2区出土遺物実測図③ (1/3)



第23図 第1次調査2区出土遺物実測図④ (1/3・1/2)



第24図 第1次調査3区出土遺物実測図(1/3)

第20～23図は2区出土遺物である。60・61は土師器炮烙で、外面に煤が付着する。62は瓦質土器の鉢である。63は縄文土器深鉢で、内外面に貝殻条痕を施す。64～69は陶器で、64は甕である。65は瓶で、内面には鉄分が付着する。66は焼締陶器の鉢、67は施釉陶器の鉢、68は肥前産陶器の鉢、69は焼締陶器の甕である。70～75は染付磁器で、70は広東碗、71は碗、72は紅猪口、73・74は皿、75は鉢である。76～79は瓦類である。76は軒丸瓦で、瓦当中央に左巻き巴文とその外周に連珠文を施す。77は平瓦で、側面に方形の線刻を連続的に施す。78は平瓦で、凸面に刷毛目状の条線部に円形文と、その下部に凹枠区画内に「飯塚 神」のエンボスがみられる。同一地点で出土した同種の瓦から、このエンボスは「飯塚 神保製瓦所」であることが分かる。79は棧瓦で、側面に「永」の刻印を施す。80・81は砂岩製の硯である。82は砂岩製の砥石で、上下両面に顕著な擦痕が残る。83は骨製の歯ブラシで、持ち手部には「ライオン歯刷子 一號形」の線刻と端部に穿孔を施し、ブラシ部には毛を植毛するための孔を穿つ。

第24図は3区出土遺物である。84は土師器の炮烙か。外面の特徴は行平鍋に似る。85は施釉陶器行平鍋の把手である。86・87は施釉陶器の鉢で同一個体である。底面には墨書が見られるが判読できない。88は染付磁器小碗、89は染付磁器丸碗で、底面には「岐425」の統制番号を持つ。外面には茶釜から顔や手足を出す狸が描かれ、分福茶釜のモチーフとみられる。90は蕎麦猪口、91は急須蓋である。

第4章 第2次発掘調査の成果

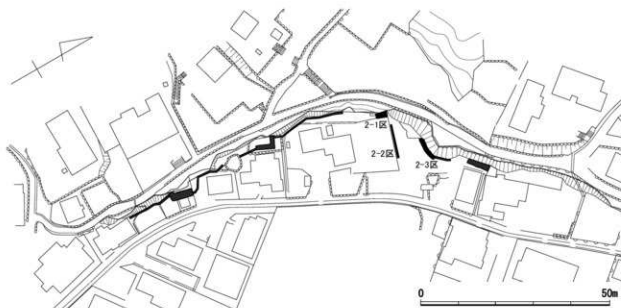
第1節 三次元測量調査の成果

第2次調査は第1次調査に北接する場所で、第1次調査の崖面が屈曲して東側へ張り出す部分にあたる（第25図）。発掘調査ではまず対象壁面の三次元測量を行い、次いで樋溝設置箇所の発掘調査の順で行った。三次元測量及び発掘調査の方法については第1次調査と同じである。

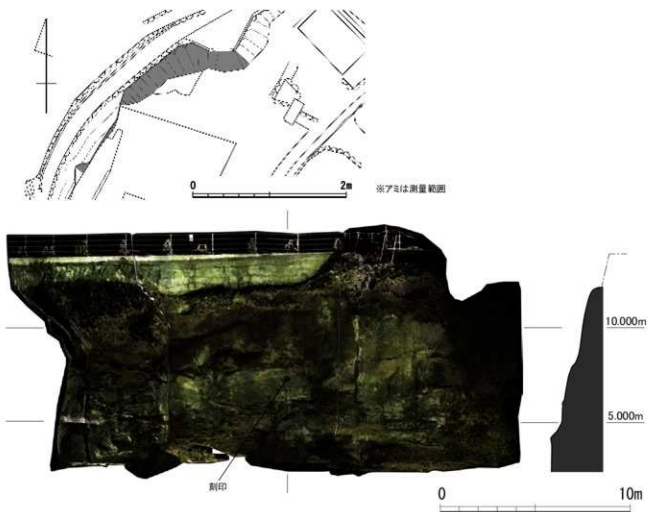
第2次調査区の壁面は高さ約8～10mを測り、対象面積は273㎡である（第26図）。中央部壁面の角度は、堀部はほぼ垂直に立ち上がり、中位から頂部にかけては約76°を測る。それに対し、第1次調査と第3次調査側の壁面はほぼ垂直に近い。石質は第1次調査と第3次調査のそれぞれ境目付近はクラックが多数認められるなど必ずしも良好とはいえないが、中央部分では堀部こそ無数のクラックが入るものの、中位から頂部にかけては良好である。堀部は湧水を溜める池が2箇所に分れるなどの改変を受けている。この石質良好の部分において刻印を確認した。この刻印は当初目視では確認できなかったが、測量データの解析中にその存在を確認したため、急遽写真・拓本による記録作成調査を実施した。

刻印・刻銘等

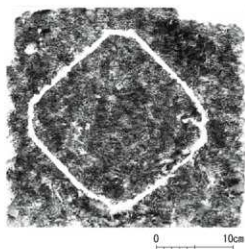
1箇所で刻印を確認した（第27図）。白杵藩稲葉家の家紋「隅切折敷三字文」とみられるが、中心の「三」字がなく、枠だけの刻印である。枠線部分も彫りが浅く痕跡的となっており、刻印が彫られた後に、採石等により表面が削られた可能性が考えられる。「三」字を欠くのは、これが削られたことにより消失したものか、当初から彫られていなかったものかは判断が難しいが、中心部に「三」字の痕跡が全く認められないことから、後者の可能性が高い。なお、枠だけの刻印は第3次調査でも確認している。



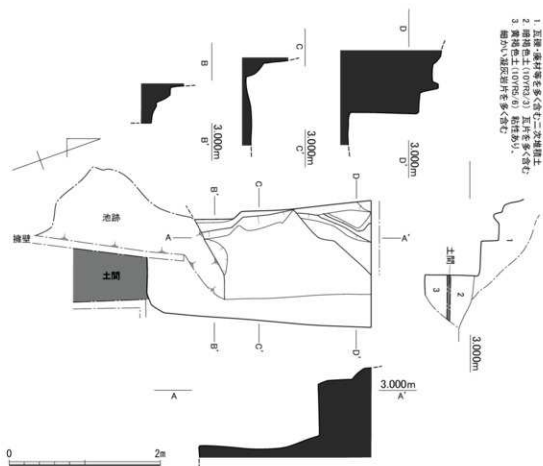
第25図 第2次調査の調査区配置（1/1,000）



第26図 第2次調査三次元測量図 (1/500・1/200)



第27図 第2次調査刻印拓影 (1/5)



第28図 第2次調査1区平面・断面図 (1/50)

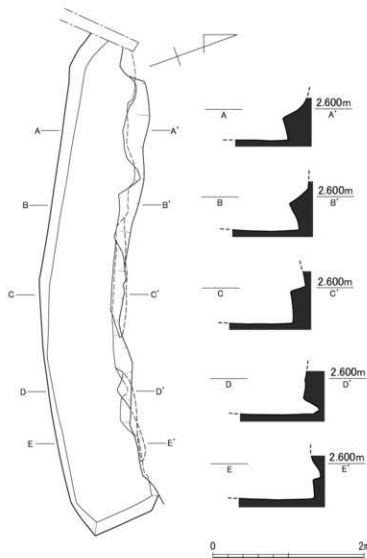
第2節 発掘調査の成果

第2次調査では、側溝設置に伴い3箇所を発掘調査を実施した。2-1区は第1次調査4区の北側に続く地点に設定した調査区である(第28図)。調査区の土層は、最上部に二次堆積土があり、表土(第2層)は暗褐色土で瓦を多量に含む。土間を挟んで下層の黄褐色土層があり、粘性を帯び凝灰岩片を多量含む。第1次調査と同様に、上層・下層とも近世から近現代のものを含み、層位に明確な時期差は認められない。

調査区の南端部は壁面に構築された池と、それを埋めるために設置された土間により全体に攪乱を受けている。北半部では、採石痕跡とみられる階段状の岩盤の落ち込みを検出した。特に北端部のD断面では、最上部で東側を土手上に残して浅く凹む面があり、そこから一段ステップがあって約50cmの垂直に切り立つ岩壁を形成している。

2-2区は2-1区から東側に続く側溝設置箇所である。掘削深度が約0.5mと浅いうえに崖面から離れるため、一部で岩盤面を検出したものの、大部分は埋土内に収まる状態で、検出した遺構はなく、遺物の回収に留まった。

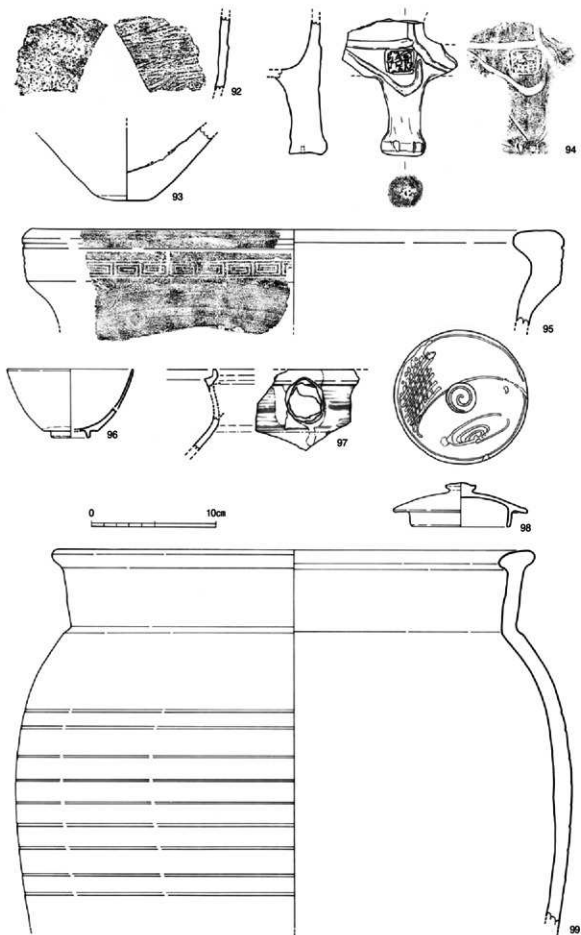
2-3区は2-1区と池を挟んで北東側に設定した調査区で、壁面に刻印を確認した場所の裾部に当たる(第29図)。底面は全体に凝灰岩の岩盤を検出したが、この面に明確な遺構は確認されず、崖面基部で階段状の落ち込みが複数認められた(A-E断面)。東端部側のD・E断面では、段の基部が崖面内側にオーバーハングした状況が見られる。いずれも採石による痕跡とみられるが、上述のとおり基部側は池の設置や宅地造成に伴う地形改変を受けており、これらすべてが近世の採石痕跡とは断定できない。



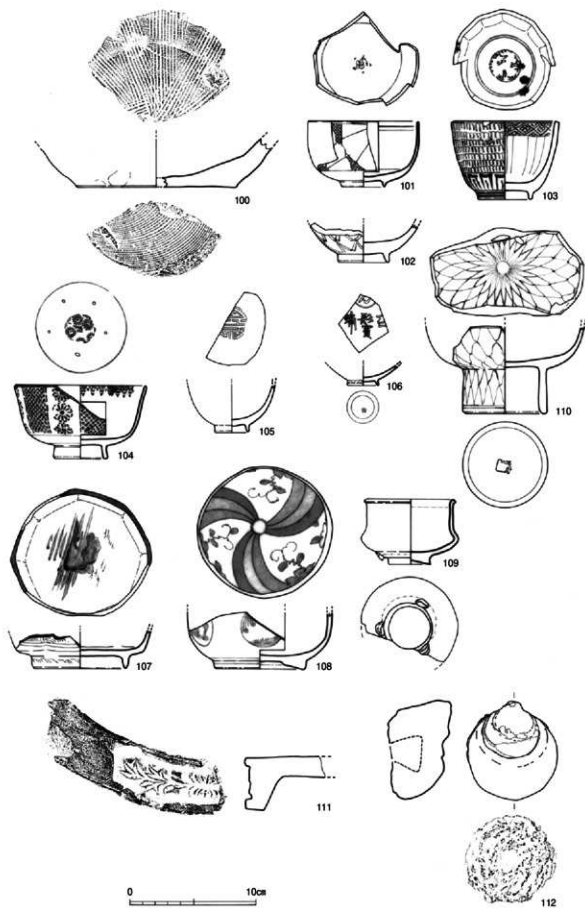
第29図 第2次調査3区平面・断面図（1/50）

第3節 出土遺物

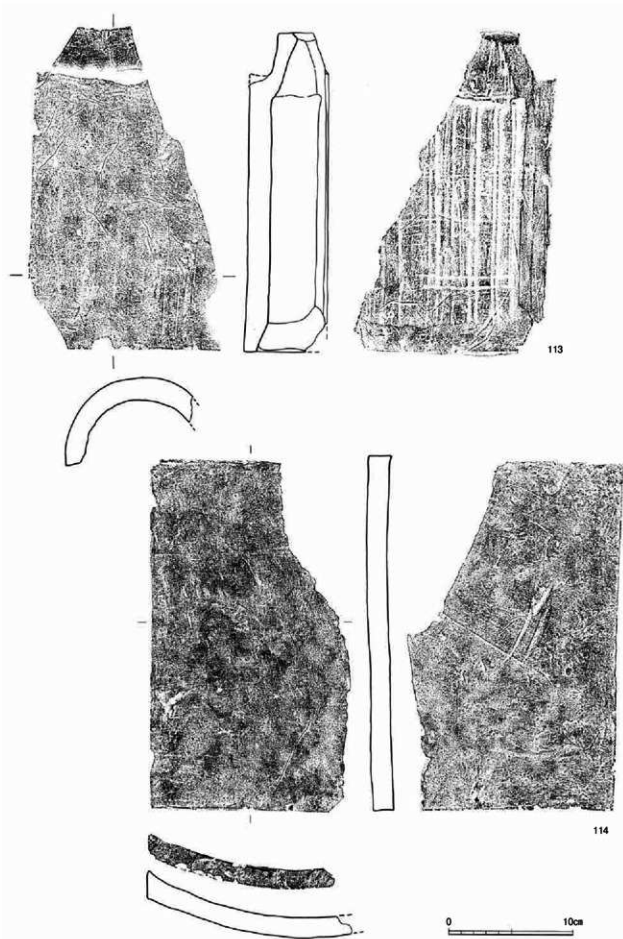
第2次調査の出土遺物を第30～44図に掲げる。92～130は2－1区出土遺物である。92は縄文土器の深鉢で、内面に横位の貝殻条痕を施す。93は弥生土器壺で、底部は小さな平底を呈する。94は土師器埴輪の脚部で、「臼杵丸山」の刻印から丸山焼の製品と分かる。95は瓦質土器甕で、外面に沈線と雷文帯を配する。96～100は陶器で、96は関西系の施釉碗、97は関西系行平鍋、98は急須蓋、99は甕、100は摺鉢である。101～109は磁器。101は17世紀後半～18世紀前半の丸碗、102は18世紀後半のいわゆるくらわんか碗、104は型紙刷絵の碗で明治初年に比定される。105は見込みに「壽」字をあしらう小碗で、1850年代の製品である。106は坏で、見込みに「蛸蟹」□とあり、櫛の木から採取した木酢製髪付油の整髪料を入れる髪水入として用いられたものか。107・108は鉢で、107は破損面に焼継ぎ痕跡が認められる。109は青磁香炉、110は一重網目文を施す盃洗である。111～128は瓦類である。111は軒平瓦、112は鬼瓦の宝珠、113は丸瓦。114～116は平瓦で、114は「引合」、115は「神」の刻印を施す。116は凹面に櫛歯状工具による条線文を施す。117～128は棧瓦である。117～120は「相販」、122は「細□」、123は「引合」、124～126は「永」、127は「上」の刻印を施す。121は刻印が見られるが文字は判読できない。128は凸面に方形区画内に条線を充填するエンボスと、方形区画内に「製」字の陽刻が見られる。第1次調査の第23図78の瓦に似るが、文字は異なる。凹面にはセメントが付着する。129は鉄製刀子片、130は型押し成型の馬形土製品である。



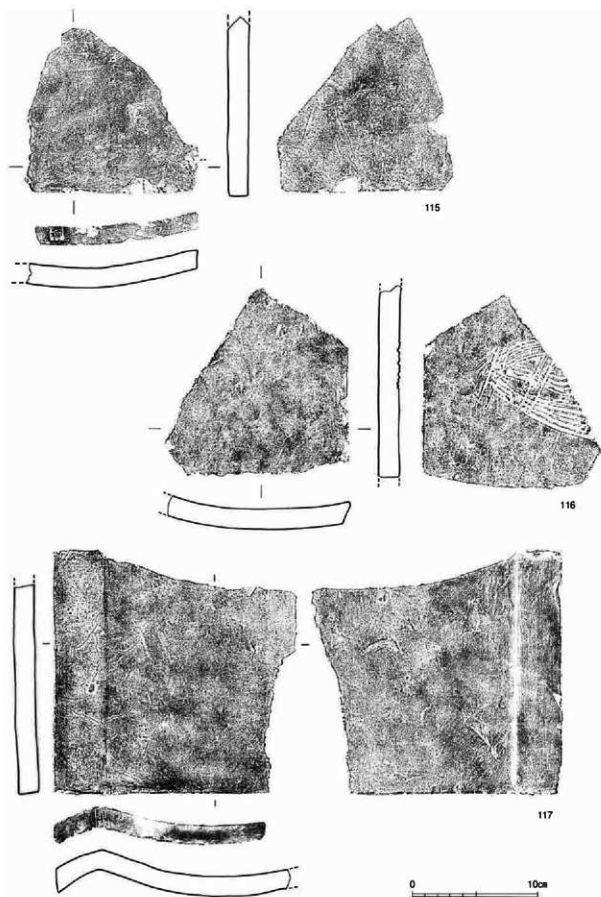
第30図 第2次調査1区出土遺物実測図①(1/3)



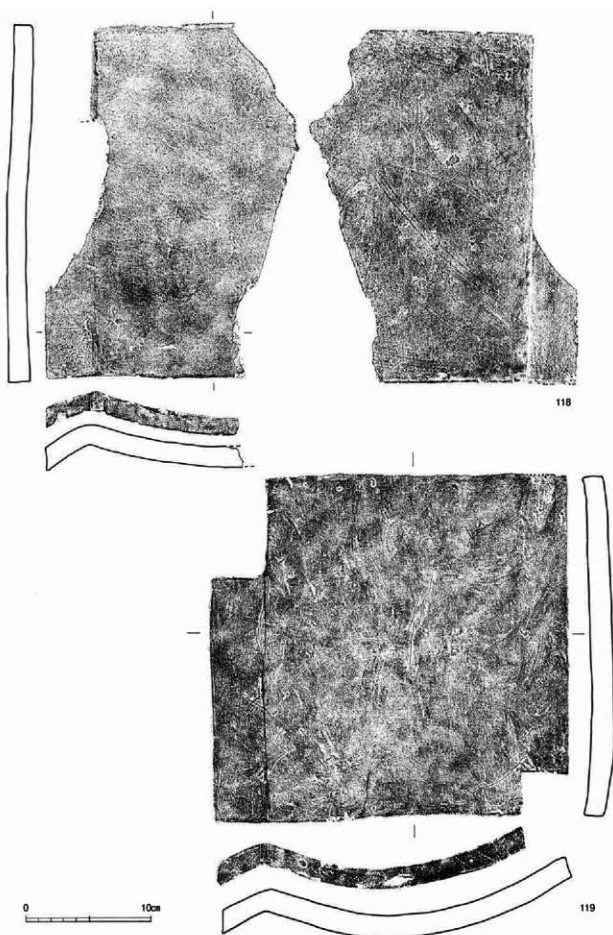
第31図 第2次調査1区出土遺物実測図② (1/3)



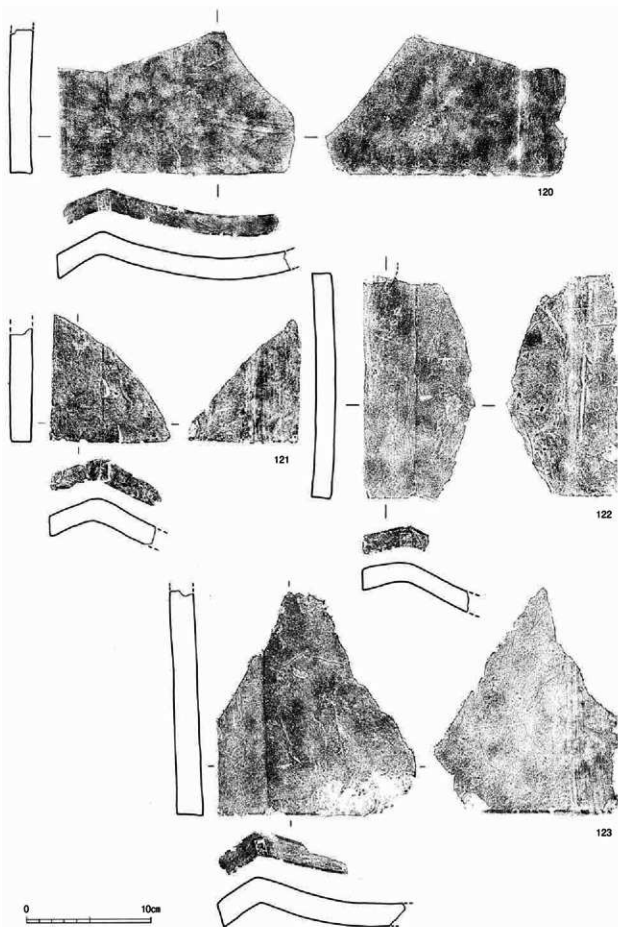
第32図 第2次調査1区出土遺物実測図③ (1/3)



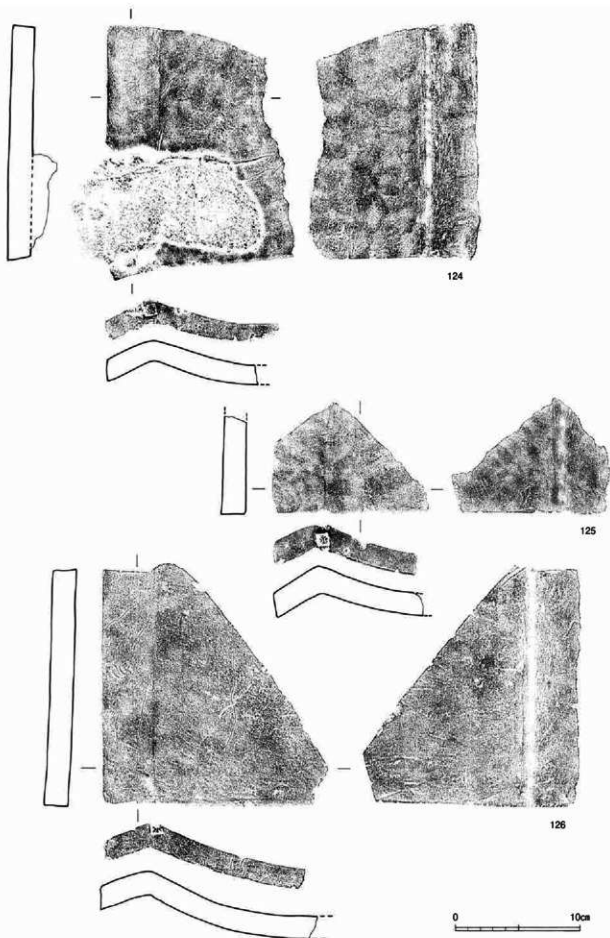
第33図 第2次調査1区出土遺物実測図④ (1/3)



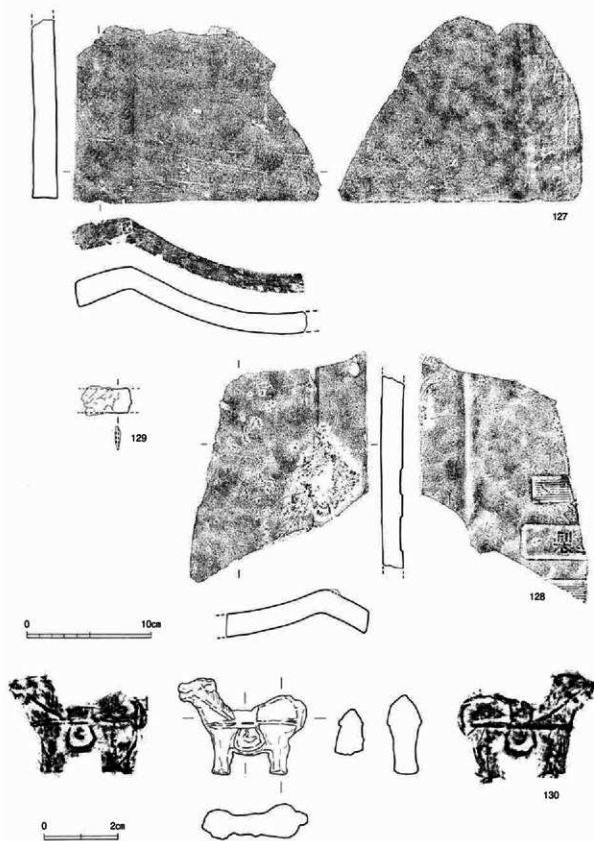
第34図 第2次調査1区出土遺物実測図⑤(1/3)



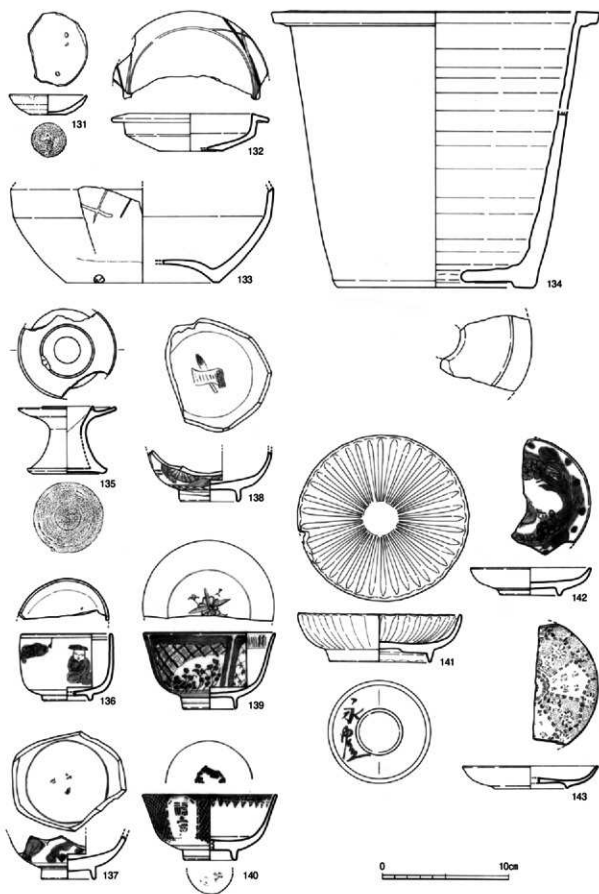
第35図 第2次調査1区出土遺物実測図⑥ (1/3)



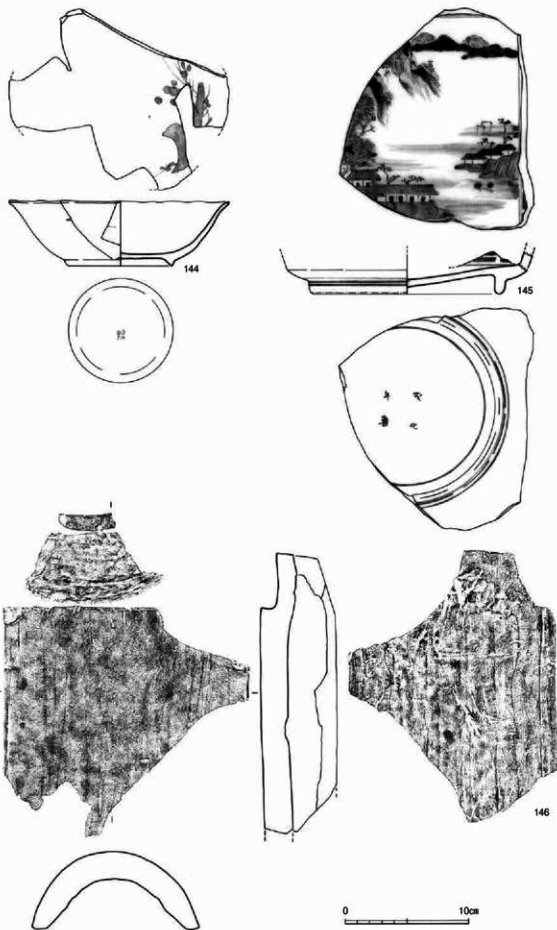
第36図 第2次調査1区出土遺物実測図⑦(1/3)



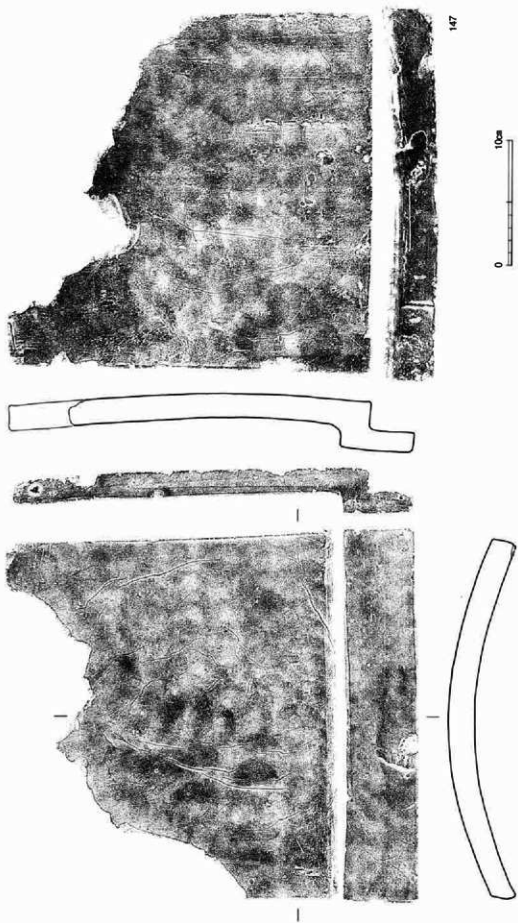
第37図 第2次調査1区出土遺物実測図⑧ (1/3・1/1)



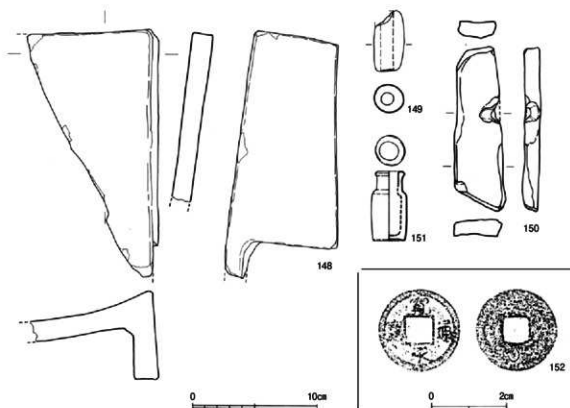
第38図 第2次調査2区出土遺物実測図①(1/3)



第39図 第2次調査2区出土遺物実測図② (1/3)



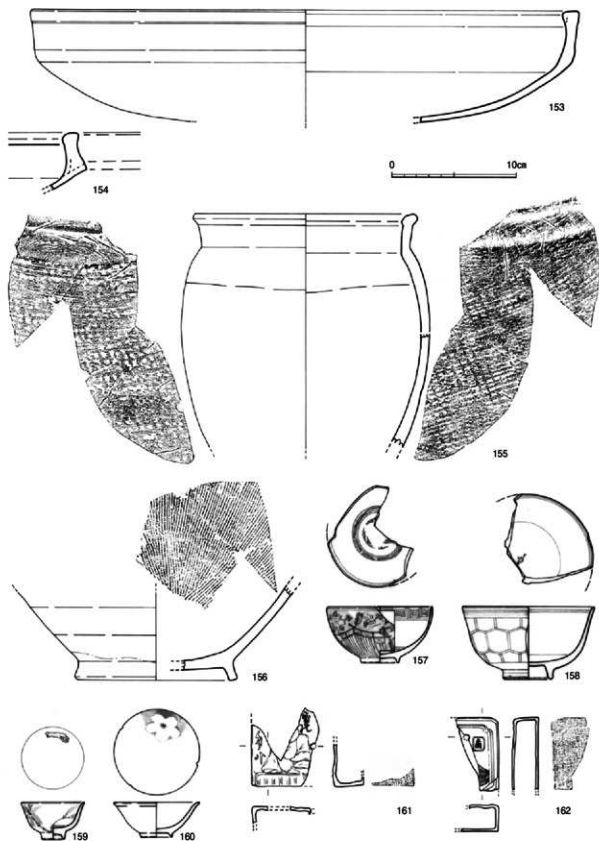
第40図 第2次調査2区出土遺物実測図③(1/3)



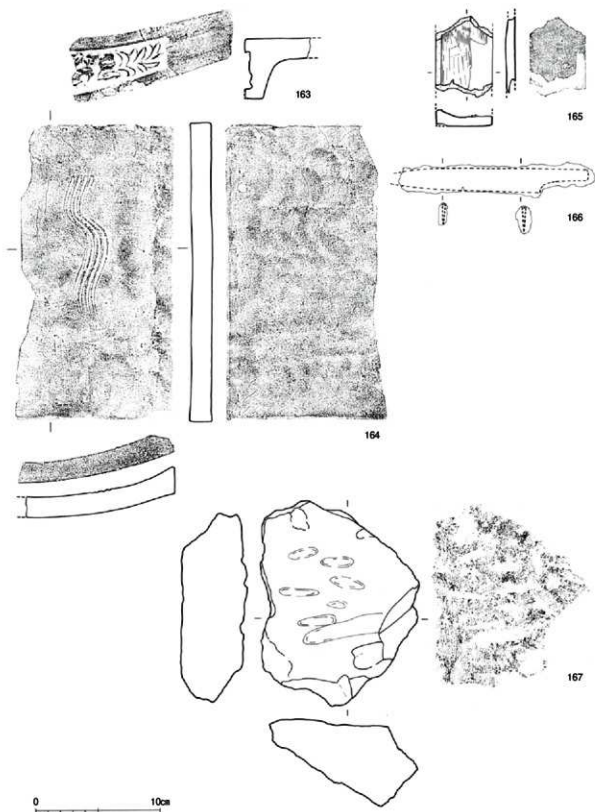
第41図 第2次調査2区出土遺物実測図④ (1/3・1/1)

第38～41図は2-2区出土遺物である。131は施釉陶器の灯明皿、132は関西系陶器土瓶蓋、133は同じく土瓶、134は施釉陶器植木鉢、135は灯火具である。136～145は磁器で、136～138は丸碗、139は端反碗、140は型紙刷絵の碗。141は青磁の皿で、蛇の目凹型高台で高台内に「永□屋」の墨書が残る。142・143は皿で、142は瀬戸美濃産である。143は型紙刷絵によ絵付けを施すもので、明治初年に比定される。144は鉢で、高台内に「岐217」の統制番号を持つもので、昭和15～21年に製造されあ統制陶磁器である。145は鉢で近代の所産か。高台内に「成化年製」の銘款を施す。146は丸瓦、147は角棧伏間瓦か。148は右袖瓦である。149は土師質焼成の管状土鍾、150は結晶片岩製の砥石。151はガラス瓶で薬瓶か。152は寛永通寶で、「寛」字の几部の付け根が離れる特徴から、元禄10年(1697)以降に製造された新寛永銭であると分かる。

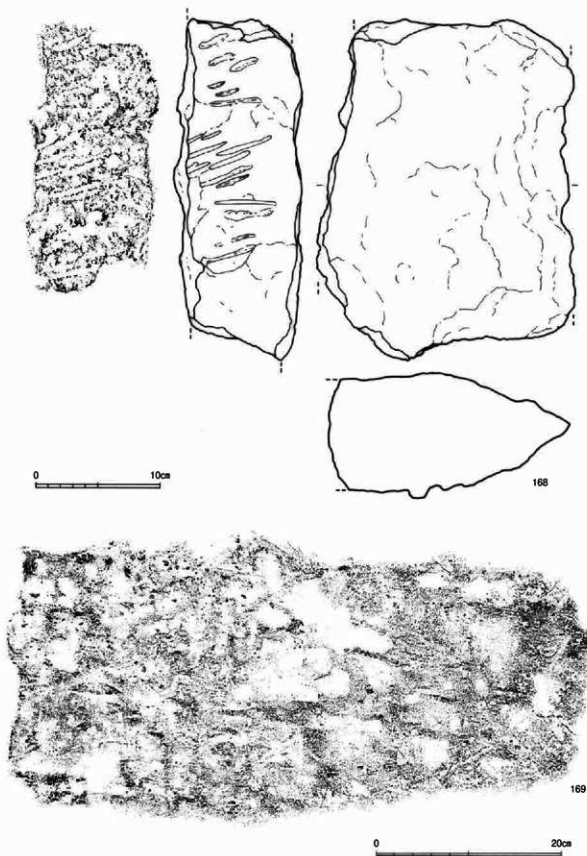
第42～44図は2-3区出土遺物である。153は土師器、154は瓦質土器の炮烙である。155は陶器甕で、内外総にタタキ痕が残る。156は陶器摺鉢で、底部が高台状となる九州産のもの。157は染付磁器丸碗、158は染付磁器端反碗、159・160は磁器小坏、161・162は磁器水滴である。163は軒平瓦、164は平瓦で、164は凹面に櫛歯状工具による波状文を施す。165は石製硯で、陸部分に墨の痕跡が残る。166は鉄製小刀である。167～169(169は拓本のみ)は凝灰岩片で、いずれも表面に粗いハツリ痕が残る。



第42図 第2次調査3区出土遺物実測図①(1/3)



第43図 第2次調査3区出土遺物実測図② (1/3)



第44図 第2次調査3区出土遺物実測図③ (1/3・1/4)

第5章 第3次発掘調査の成果

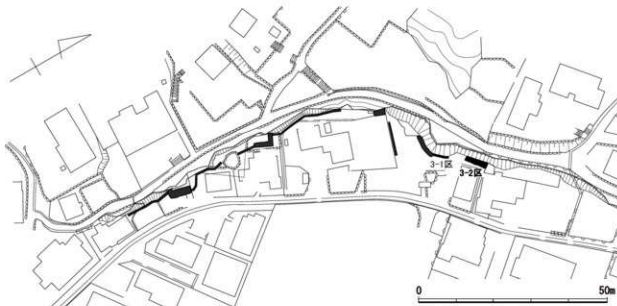
第1節 三次元測量調査の成果

第3次調査は第2次調査に北接する場所で、第1次調査区壁面が東へ屈曲した第2次調査壁面が、再度北北西へ折れたその付け根部分にあたる（第45図）。発掘調査ではまず対象壁面の三次元測量を行い、次いで側溝設置箇所の発掘調査の順で行った。三次元測量及び発掘調査の方法については第1・2次調査と同じである。

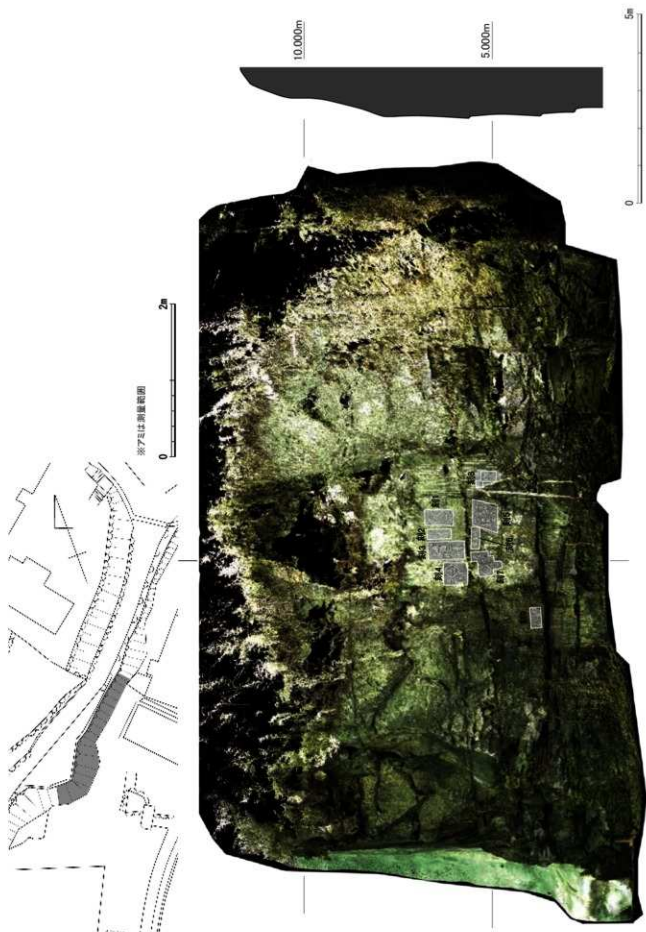
第3次調査区の壁面の高さは約9.5～10mで、対象壁面は約113mを測る（第46図）。第3次調査の壁面のほぼ真ん中あたり、全体の約1/3にあたる壁面で刻印・刻銘を確認しており、この部分の壁面の立ち上がりは、下半部はほぼ垂直の92°で、それより上部は76°とやや緩やかとなる。この部分は横方向に3つの段が付いており、採石痕跡の可能性が高い。石質は第2次調査との境目付近の基部側は横方向の細かいクラックが多数認められるなどあまりよくない状況を示すが、中位から上部はクラックも少なく概ね良好な状態である。基部側は宅地造成によるものか粗いハツリが認められ、また穴蔵状の横穴が穿たれるなどの改変を受けている。刻印・刻銘は対象壁面のほぼ中間地点の中位に集中しており、9箇所で刻印・刻銘を確認している。

刻印・刻銘（第47・48図）

刻1は白杵藩稲葉家の家紋「隅切折敷三字文」の刻印と、その上に「御」とみられる刻銘がある。刻2は刻1の左側にある刻銘で、彫りが浅いうえに欠損も見られ判然としないが、「仰ノ□志垣」であろうか。刻3は3行にわたり「巳／明治二年／己四月上旬」と刻む。巳と己は明治二年の干支の「己巳」である。刻4は刻3の左下にある刻印・刻銘で、右上に稲葉家の家紋刻印を配し、その左に「市石」の刻銘、その下に人名を示すとみられる「米三」の刻銘を配する。「市石」は市浜村の頭文字、石は石工で市浜村の石工・米三という意味であろうか。刻5は刻1～4の一段下の壁面で、刻1の下に位地する。「戸室／小庄ヤ／忠六／市同／加兵エ／同 吉兵エ」と刻む。ここに記された戸室と市浜の小庄屋3名が採石の現場責任者なのであろう。刻6は刻5の左上にある刻銘で、右から「納／懸（カ？）／米」と刻す。刻7は刻6の左にある刻印・刻銘で、「戸室村／世話人／佐介／刻印」と刻む。刻印は稲葉家家紋を示すとみられるが、第2次調査と同様に中心の三字文がなく、隅切折敷の枠だけである。中心部に三字の痕跡が見られないため、当初から枠だけであった可能性が高い。世話人となるので、おそらく庄屋の佐介が採石の総責任者として、3名の小庄屋を管理監督したのであろう。刻印を伴うので、



第45図 第3次調査の調査区配置（1／1,000）

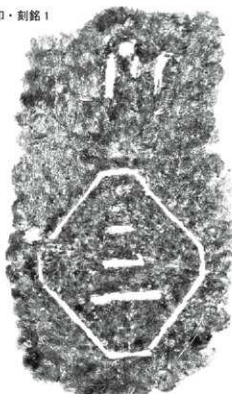


第46図 第3次調査三次元測量図 (1/500・1/100)

刻印・刻銘 2



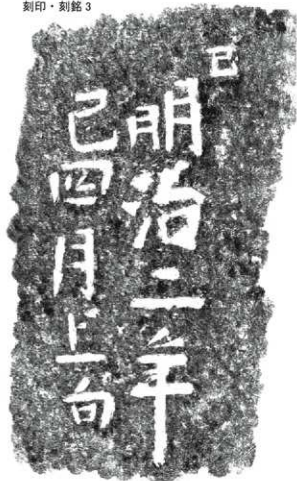
刻印・刻銘 1



刻印・刻銘 4



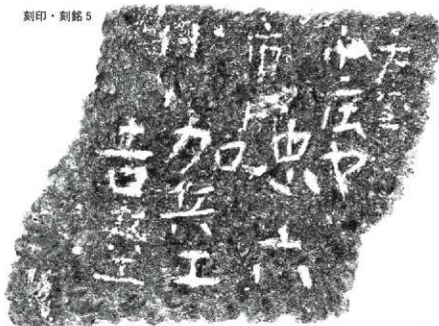
刻印・刻銘 3



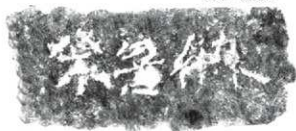
0 20cm

第47図 第3次調査刻印・刻銘拓影① (1/8)

刻印・刻銘 5



刻印・刻銘 6



刻印・刻銘 7



刻印・刻銘 8



刻印・刻銘 9



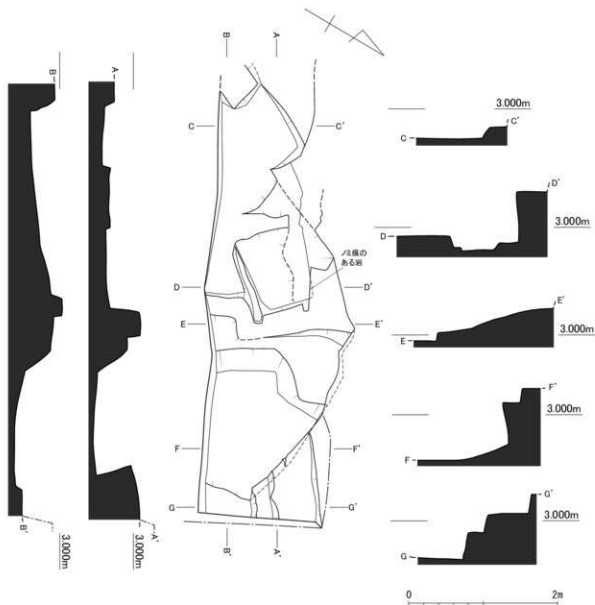
0 20cm

第48図 第3次調査刻印・刻銘拓影② (1/8)

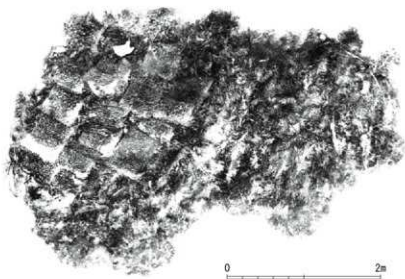
藩から任命されたのであろうが、佐介の名前があるため三字を刻まないことで藩主への遠慮を示した可能性が考えられる。刻8は刻5の左にある刻銘で、「源治／四」であろうか。「源治」は太く明瞭な刻字であり、こうした明瞭な字は年号の刻銘にみられるのだが、源治という年号は存在しない。ただ、「源」は同音異字であるなら、「慶応」の前の「元治」を意味する可能性が考えられる。「四」は四月の意味であろう。元治元年もしくは2年ということになるが、元治2年4月7日には慶応に改元しているため、前者の可能性が高い。いずれにしても、刻3の明治2年より一段階古い刻銘ということになる。刻9は刻1～8とは少し南に離れた場所にある刻銘で、「定／安助」と刻む。

第2節 発掘調査の成果

第3次調査では、側溝設置に伴い2箇所を発掘調査を実施した。3-1区は第2次調査地にある池から東北東に続く側溝設置箇所に設定した調査区である。掘削が50cm程と浅いため、やや大振りの凝灰岩片等の出土は見られたが岩盤には到達せず、遺構は確認されなかった。ただ、堆積土中からは陶磁器や瓦類が多数出土しており、



第49図 第3次調査2区平面・断面図(1/50)



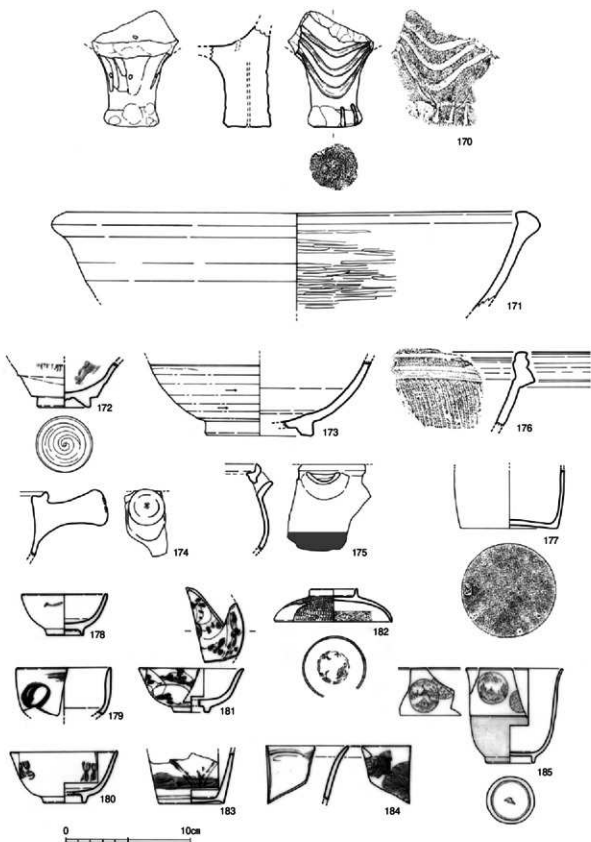
第50図 第3次調査2区ノミ痕拓影(1/5)

第3次調査の出土遺物のほとんどはこの3-1区からの出土である。ここでの遺物の多さは、池の周辺という事で、水に関わる何らかの祭祀が行われていたのであろうか。

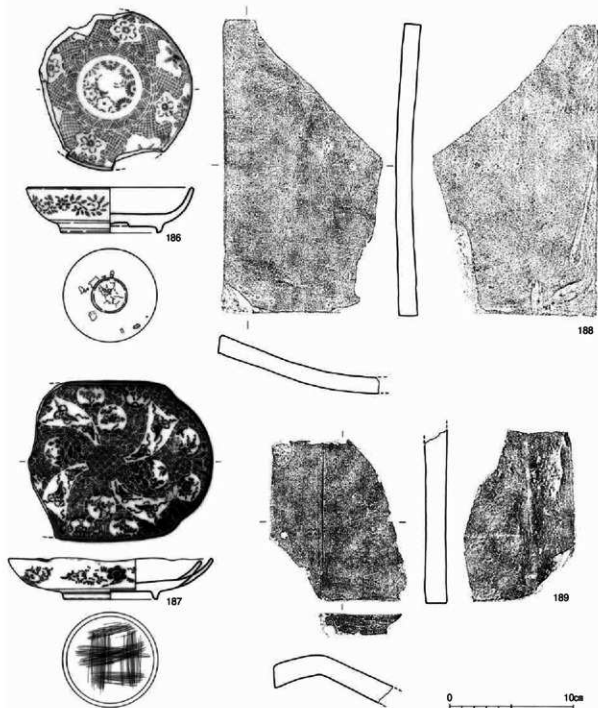
3-2区は3-1区の北側の崖沿いの側溝設置箇所に設定した調査区で、調査面積は約10.7㎡である(第49図)。調査区のはほぼ全体で岩盤を検出しており、各所で採石痕跡を示すとみられる階段状の落ち込みを確認した。特にD断面は痕跡が明瞭で、方形状の窪みの両サイドにステップ状の段がつく。崖面側は0.7mほどの切り立つ壁となっている。この壁面において、表面に粗いノミ痕を確認している(第50図)。この壁面の東端部はすこし溝状に張り出しており、採石に際して周囲に溝を入れた痕跡の可能性が高い。また、F断面・G断面でも階段状の落ち込みを確認しており、F断面では岩盤側は0.6mほどの切り立つ壁面を形成している。

第3節 出土遺物

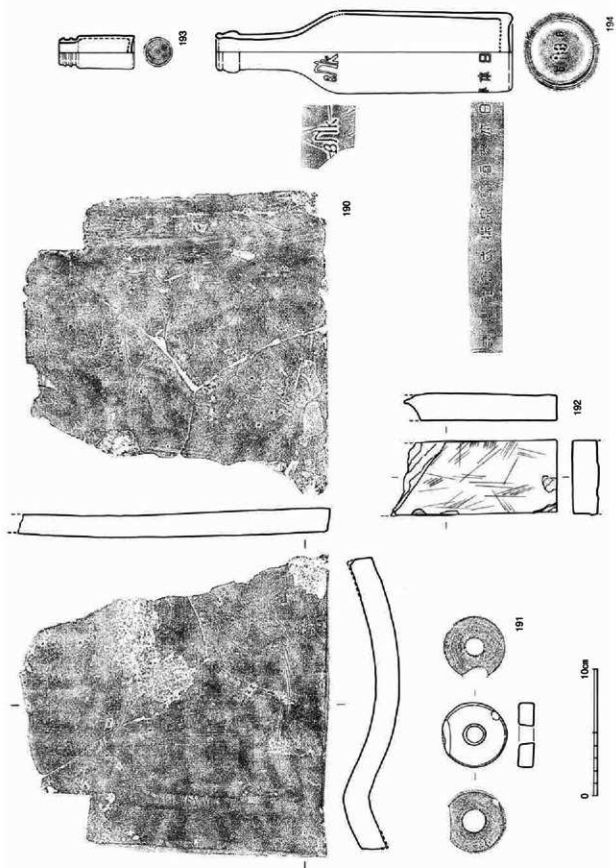
第3次調査の出土遺物を第51～54図に掲げる。170は土師器埴炉の脚部である。獣脚形で、外面に3条の沈線(しんせん)を施す。刻印はないが白牡丹山焼の可能性が高い。171は瓦質土器の鉢で、内面に粗いヘラミガキを施す。172は施釉陶器の碗で、白色がかった釉を施す。長門の萩焼の製品である。173は陶器の鉢、174は関西系陶器行平鍋の把手、175は関西系陶器行平鍋の片口部である。176は焼締陶器摺鉢で、和泉堺産のもの。177は施釉陶器で、底面に刻印を施す。長門萩焼の製品である。178～187は染付磁器である。178は小碗、179は碗、180・181は瀬戸美濃産の端反碗、182は碗蓋、183は蕎麦猪口、184は鉢、185は湯呑碗である。186・187は型紙刷絵の皿で、いずれも明治初年に比定される。187は高台内に格子状の無数の擦痕が認められ、何らかの作業台として転用した可能性がある。188～190は瓦類で、188は平瓦、189・190は棧瓦である。189は側面に「日□」の刻印を施す。191は磁器製の戸車である。192は粘板岩製の砥石で。上面に使用による擦痕が残る。193・194はガラス瓶である。193は底面に「8/□」のエンボスを施す。194はビール瓶で、肩部に商標を示す「BNK」のエンボスと、底部上方に「日本麦酒鉱泉株式会社製造」、底面に「S NB 6」のエンボスを施す。日本麦酒鉱泉株式会社は大正10年(1921)～昭和8年(1933)に存在した会社である。195は凝灰岩の加工石材で、上面にハツリ痕、側面に長方形のノミ痕が残る。ノミ痕は岩盤に残されたもの(第50図)と同様であり、これと同時期に調整されたものの可能性が高い。



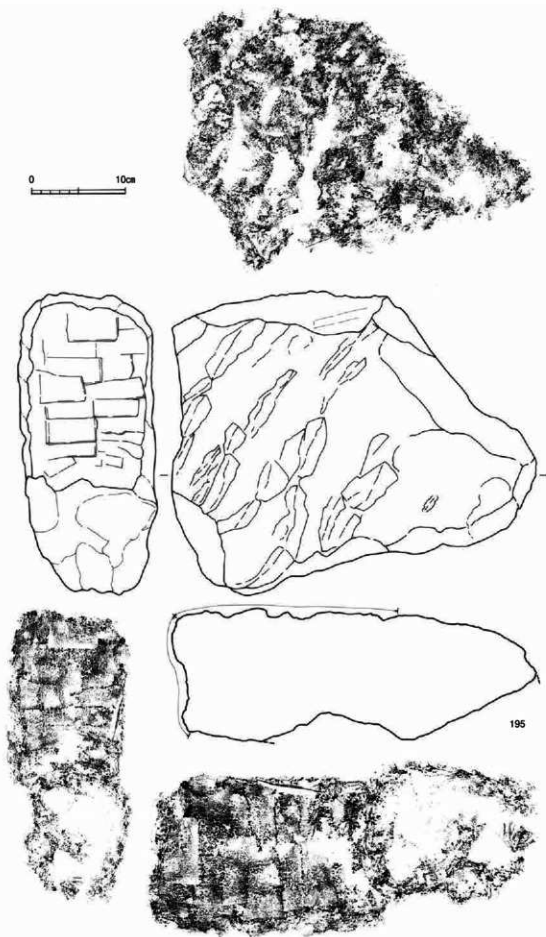
第51図 第3次調査出土遺物実測図① (1/3)



第52図 第3次調査出土遺物実測図② (1/3)



第53図 第3次調査出土遺物実測図③ (1/3)



第54図 第3次調査出土遺物実測図④ (1/4)

第2表 第1次調査 土器・陶磁器・ガラス器観察表①

採掘番号	器種		出土 地点	法量 (cm)		器面調整		色調 (外面/内面)	備考
				直径	器高	外面	内面		
第15区	1	土師器 小皿	1A区	口径 (6.7)	1.1	ヨコナデ、回転糸切り	ヨコナデ	橙色/橙色	内面施軸
	2	土師器 硯鉢	1A区		(9.5)	ナデ	ヨコナデ	黄褐色/	臼杵丸山境か
	3	土師器 硯鉢	1A区	口径 (20.0)	(11.4)	ナデ	ナデ	にぶい橙色/にぶい 橙色	
	4	瓦質土器 鉢	1A区		(3.4)	ヨコナデ→ミガキ	ヨコナデ→ミガキ	黒褐色/黒褐色	外面赤色顔料
	5	陶器 鉢	1A区		(9.6)	ヨコナデ、施軸	ヨコナデ、施軸	黒褐色・赤褐色/ 灰赤色	
	6	陶器 鉢	1A区	括れ部 (10.1)	(12.3)	施軸	ヨコナデ	褐色・青黒色/赤 褐・浅黄色	底面黒青「五十」 or「吾」
	7	備前 鉢	1A区	口径 (13.2)	(5.1)	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい赤褐色/に ぶい赤褐色	肥前
	8	陶器 鉢	1A区	底径 7.6	(4.3)	施軸・露胎	施軸・刷毛目文		
	9	陶器 急須蓋	1A区	口径 5.0	2.9	ヨコナデ、施軸	ヨコナデ		
	10	陶器 土瓶蓋	1A区	底径 2.7	2.1	施軸	露胎・回転糸切り		
	11	陶器 土瓶	1A区	口径 (8.6)	(8.7)	ヨコナデ、沈線、 上半、施軸、下半 露胎	ヨコナデ・露胎	明緑灰色/オリ ブ灰色	
	12	陶器 土瓶	1A区		(5.2)	沈線・ヨコナデ	ヨコナデ・施軸	黒褐色/橙色・黒 褐色	
	13	関西系陶器 行平鍋把手	1A区			施軸	露胎	にぶい黄褐色/淡 黄色	関西系
第16区	14	陶器 摺鉢	1A区	口径 (28.4)	10.2	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ、 摺目	にぶい赤褐色・橙 色/灰赤色・明赤 褐色	相泉・堺
	15	陶器 摺鉢	1A区	口径 34.4	14.0	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ、 摺目	暗赤褐色・橙色/ 赤褐色	相泉・堺
	16	陶器 摺鉢	1A区	口径 (31.6)	12.4	ヨコナデ・施軸	ヨコナデ・摺目	灰赤色/灰赤色	肥前
	17	陶器 碗	1A区	口径 (9.4)	4.7	施軸・高台露胎	施軸		肥前
	18	陶胎染付 碗	1A区	底径 4.5	(3.7)	ヨコナデ・施軸	ヨコナデ・施軸	にぶい褐色/にぶ い褐色	肥前
第17区	19	磁器 碗	1A区	口径 (9.4)	4.4	施軸・露胎	施軸	明緑灰色/明緑灰 色	肥前、虹碗か
	20	磁器 端反碗	1A区	口径 (8.2)	3.7	ヨコナデ・施軸	ヨコナデ・施軸	白色/白色	瀬戸美濃か近代
	21	磁器 碗	1A区	口径 (9.8)	4.3	施軸	施軸		型紙刷絵
	22	磁器 碗蓋	1A区	口径 8.7	2.1	施軸	施軸		肥前
	23	磁器 端反碗蓋	1A区	口径 8.5	2.8	施軸	施軸		肥前
	24	磁器 寄麦燈門	1A区	口径 (7.2)	5.9	施軸・露胎	施軸		肥前
	25	磁器 皿	1A区	口径 (13.4)	3.9	施軸	施軸・露胎	灰白色/灰白色	肥前
	26	磁器 皿	1A区	口径 11.3	2.3	施軸	施軸		瀬戸美濃か近代
	27	磁器 鉢	1A区	口径 14.6	5.7	施軸・露胎	施軸		肥前焼痕あり
	28	磁器 鉢	1A区	口径 (18.2)	8.7	施軸・露胎	施軸		肥前
	29	磁器 段重	1A区	口径 (11.5)	(8.5)	施軸・露胎	施軸	灰白色/灰白色	
	30	磁器 段重	1A区	口径 (14.8)	4.6	施軸・露胎	施軸	灰白色/灰白色	近代
	31	磁器 香炉	1A区	底径 (3.3)	(3.0)	施軸・露胎	施軸・露胎	灰白色/灰白色	瀬戸美濃
	32	磁器 御神酒徳利	1A区	底径 3.3	(3.6)	施軸	施軸		
第18区	33	磁器 瓶	1A区	口径 (3.7)	(3.8)	施軸	施軸・露胎	明青灰色/明青灰 色	肥前
	34	磁器 瓶	1A区	底径 8.6	(9.9)	施軸	露胎	明青灰色/明青灰 色	33と同一個体
第19区	35	陶器 瓶	1A区	底径 (8.8)	(6.6)	施軸・露胎	不詳		高台内黒書内面鉄 分付着
	39	陶器 皿	1B区	口径 7.2	1.8	施軸・露胎	施軸		輪花皿
	40	陶器 碗	1B区	口径 (10.0)	5.9	施軸・露胎	施軸・露胎		関西系
	41	陶器 碗	1B区	口径 (12.2)	5.7	施軸	施軸	黄灰色/黄灰色	長門・萩焼輪花碗
	42	陶器 摺鉢	1B区	口径 (13.7)	6.8	ヨコナデ・回転糸 切り	ヨコナデ・摺目	赤褐色・橙色/赤 褐色	
	43	陶器 瓶	1B区	胴部径 (14.8)	(7.7)	ヨコナデ・施軸	ヨコナデ・施軸		
	44	陶器 急須蓋	1B区	口径 6.1	3.9	施軸	施軸	黒色/にぶい赤褐 色	

第2表 第1次調査 土器・陶磁器・ガラス器観察表②

採掘番号	器種	出土 地点	法量 (cm)		器面調整		色調 (外面/内面)	備考	
			直径	器高	外面	内面			
第19回	45 陶磁器	土瓶蓋	1B区	口径 (109)	20	施釉	施釉・回転系切り	暗赤褐色/赤褐色	
	46 磁器	碗	1B区	口径 74	36	施釉	施釉	灰白色/灰白色	肥前くらわんか手
	47 磁器	端反碗	1B区	口径 (104)	53	施釉	施釉	灰白色/灰白色	肥前
	48 磁器	端反碗	1B区	口径 99	57	施釉・露胎	施釉	灰白色/灰白色	肥前
	49 磁器	端反碗	1B区	口径 (92)	47	施釉・露胎	施釉	灰白色/灰白色	瀬戸美濃
	50 磁器	碗	1A区・1B区	口径 (100)	57	施釉・露胎	施釉	灰白色/灰白色	型紙刷絵近代
	51 磁器	広東碗蓋	1B区	口径 96	25	施釉・露胎	施釉	灰白色/灰白色	
	52 磁器	端反碗蓋	1B区	口径 92	30	施釉・露胎	施釉	灰白色/灰白色	
	53 磁器	土瓶	1B区	口径 72	81	施釉・底面露胎	露胎・一部施釉	白色/白色	
	54 磁器	小坏	1B区	口径 70	35	施釉	施釉	青白色/青白色	
第20回	55 磁器	小坏	1B区	口径 (66)	44	施釉・露胎	施釉・露胎	青白色/青白色	
	56 磁器	皿	1B区	口径 (134)	44	施釉・露胎	施釉	灰白色/灰白色	肥前輪花皿
	57 磁器	皿	1B区	口径 (156)	37	施釉・露胎	施釉・露胎	灰白色/灰白色	輪花皿
	58 ガラス器	化粧水瓶	1B区	底径 42	(58)	型成形・底面エンボス	型成形		桃谷順天館「白色美瀬水」
	59 ガラス器	靴クリーム瓶	1B区	口径 47	34	型成形・側面・底面エンボス	型成形		コロンバス
	60 土師器	惣椀	2区	口径 (332)	(48)	ヨコナデ・指オサエ	ヨコナデ・指オサエ	暗褐色/明灰褐色	
	61 土師器	惣椀	2区	口径 (368)	(50)	ヨコナデ・未調整	ヨコナデ・ナデ	暗灰褐色/暗灰褐色	
	62 瓦質土器	捏鉢	2区	口径 (376)	(280)	ヨコナデ・ミガキ	ヨコナデ・ミガキ	灰色/灰色	
	63 縄文土器	深鉢	2区		(88)	貝殻条痕	貝殻条痕	褐色/褐色	
	64 陶器	壺	2区	口径 (110)	(102)	施釉・露胎	施釉・露胎		
第21回	65 陶器	瓶	2区	底径 82	(56)	施釉	施釉	黄土色/暗赤茶色	
	66 焼締陶器	鉢	2区	口径 (120)	74	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	褐色・明赤褐色/褐色	
	67 陶器	鉢	2区	口径 (246)	142	施釉・露胎	施釉	灰白色/灰白色	
	68 陶器	鉢	2区	口径 (234)	132	ヨコナデ	ヨコナデ・泥塗り	赤茶色/赤茶色	肥前
	69 焼締陶器	甕	2区	底径 (190)	(155)	ヨコナデ・沈線	タタキ→ヨコナデ	暗赤褐色/暗赤褐色	
	70 磁器	広東碗	2区	口径 (124)	(58)	施釉	施釉	灰白色/灰白色	肥前
	71 磁器	小碗	2区	口径 (80)	62	施釉・露胎	施釉	灰白色/灰白色	
	72 磁器	紅皿	2区	口径 (61)	21	施釉	施釉・露胎	灰白色/灰白色	肥前
	73 磁器	皿	2区	口径 133	37	施釉・露胎	施釉・露胎	灰白色/灰白色	肥前
	74 磁器	皿	2区	口径 (96)	20	施釉	施釉	灰白色/灰白色	
第24回	75 磁器	鉢	2区	底径 66	(55)	施釉	施釉	白色/白色	焼締痕あり
	84 土師器	鍋?	3区		(43)	ヨコナデ・タタキ	ヨコナデ	にぶい黄褐色/にぶい黄褐色	穿孔あり
	85 陶器	行平鍋把手	3区		(64)	施釉・露胎	施釉	淡黄色/淡黄色	関西系
	86 陶器	鉢	3区	口径 (287)	(39)	施釉	施釉	淡黄色・淡黄色/淡黄色	
	87 陶器	鉢	1A区	底径 (178)	(43)	施釉	施釉・露胎	淡黄色・淡黄色/淡黄色	底面黒書86と同一個体
	88 磁器	碗	3区	口径 (75)	39	施釉	施釉	灰白色/灰白色	
	89 磁器	碗	3区	口径 (93)	46	施釉・露胎	施釉	灰白色/灰白色	美濃・「岐425」の統制記号
	90 磁器	蕎麦猪口	3区	口径 (72)	59	施釉	施釉	灰白色/灰白色	肥前
	91 磁器	急須蓋	3区	口径 68	25	施釉	施釉・露胎	灰白色/灰白色	

第3表 第1次調査瓦類観察表

挿図番号	種類	出土地点	法量 (cm)						備考
			長さ	(15.2)	幅		厚さ	1.3	
第18図	36 軒丸瓦	1A区	長さ	28.0	幅	13.7	厚さ	1.9	左巻き巴文・珠文6残存
第22図	76 軒丸瓦	2区	長さ	(13.8)	幅	12.1	厚さ	1.6	右巻き巴文・珠文9残存、釘穴直径1.4cm
	77 平瓦	2区	長さ	(19.3)	幅	18.0	厚さ	1.6	側面に連続する方形線刻文
第23図	78 平瓦	2区	長さ	20.1	幅	13.8	厚さ	1.8	「飯塚神保製瓦所」のエンボス
	79 棧瓦	2区	長さ						刻印「永」

第4表 第1次調査石製品・骨製品観察表

挿図番号	器種	出土地点	法量 (cm)			重量 (g)	素材	備考
			長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)			
第18図	37 砥石	1A区	(18.9)	6.9	4.7	1109.1	結晶片岩	
	38 不明	1A区	(29.2)	(26.0)	10.4~15.2	7100.0	凝灰岩	表面煤付着、二次焼成
第23図	80 硯	2区	(4.0)	6.9	1.7	71.3	砂岩	
	81 硯	2区	(7.4)	6.9	1.7	146.5	砂岩	
	82 砥石	2区	(15.0)	6.0	1.1	137.2	粘板岩	
	83 歯刷子	2区	(12.5)	1.1	0.5~0.65	11.3	獣骨	柄に「ライオン歯刷子一號形」の線刻

第5表 第2次調査 土器・陶磁器・ガラス器観察表

採掘番号	器種	出土 地点	法量 (cm)		器高		器面調整		色調 (外面/内面)	備考
			直径				外面	内面		
第30区	92 縄文土器 深鉢	1区			(6.0)		不詳	貝殻条痕	赤色/におい橙色	
	93 弥生土器 甕	1区	底径	4.0	(5.8)		ナデ	ナデ	橙色・におい橙色/ におい橙色	
	94 土器器 埴如	1区			(10.8)		ナデ	ヨコナデ・ナデ	淡橙色/淡褐色	「白杵丸山」刷印豊後・ 丸山焼
	95 瓦質土器 火鉢	1区	口径	(41.8)	(7.6)		ヨコナデ・沈線・ 雷文	ヨコナデ	黒灰色/灰褐色	
	96 陶器 碗	1区	口径	(10.0)	5.5		施釉・露胎	施釉		関西系
	97 陶器 行平鍋	1区			(6.5)		施釉	施釉・露胎	黄褐色・暗褐色/ におい褐色	関西系
	98 陶器 急須蓋	1区	口径	10.8	3.5		施釉	露胎	オリーブ灰色・乳白色/ オリーブ灰色・褐色	
	99 陶器 甕	1区	口径	(37.4)	(30.3)		ヨコナデ・沈線	ヨコナデ	灰褐色/灰褐色	
	100 焼締陶器 摺鉢	1区	底径	(12.6)	(3.8)		ヨコナデ・回転 糸切り	ヨコナデ・摺目	褐色/褐色	
第31区	101 磁器 碗	1区・ 2区	口径	(12.6)	3.8		施釉	施釉	灰白色/灰白色	肥前
	102 磁器 碗	1区	底径	4.0	(3.0)		施釉	施釉	明緑灰色/明緑灰色	肥前
	103 磁器 碗	1区・ 2区	口径	(8.0)	6.1		施釉	施釉	明青灰色/明青灰色	近代
	104 磁器 碗	1区	口径	(10.2)	5.8		施釉	施釉	淡青白色/淡青白色	肥前型紙模絵、近代
	105 白磁 小碗	1区	底径	2.6	(3.7)		施釉	施釉	灰白色/灰白色	見込「壽」字1850年代
	106 白磁 小杯	1区	底径	2.5	(1.6)		施釉	施釉	灰白色/灰白色・白色	見込「願餐」 餐水入 れか
	107 磁器 鉢	1区	底径	7.2	(3.0)		施釉	施釉	灰白色/灰白色	肥前徳継痕あり
	108 磁器 鉢	1区	底径	6.9	(4.5)		施釉	施釉・露胎	灰白色/灰白色	
	109 青磁 香炉	1区	口径	(6.2)	5.1		施釉	施釉	青緑色・淡褐色/ 青緑色・淡褐色	肥前
	110 磁器 盃洗	1区	底径	6.1	(6.9)		施釉・露胎	施釉	灰白色/灰白色	肥前
第38区	131 陶器 灯明皿	2区	口径	(6.0)	1.6		別紙ヘラズリ・ 回転糸切り	施釉	淡黄色/淡黄色	関西系
	132 陶器 鍋蓋	2区	口径	(9.7)	3.0		施釉・露胎・ケ ズリ	施釉・露胎	オリーブ灰色/浅黄色	関西系
	133 陶器 鍋	2区	底径	(12.0)	(7.5)		施釉・露胎・ケ ズリ	露胎	オリーブ灰色・灰黄色/ 浅黄色	関西系
	134 土器器 植木鉢	2区	口径	(22.4)	21.7		ヨコナデ	ヨコナデ	褐色/褐色	
	135 施釉陶器 灯火具	2区	口径	3.9	5.3		施釉・露胎	施釉・露胎	オリーブ灰色・灰白色/ オリーブ灰色・灰白色	
	136 磁器 碗	2区	口径	(7.0)	5.3		施釉	施釉	灰白色/灰白色	肥前
	137 磁器 碗	2区	底径	4.2	(3.4)		施釉	施釉	灰白色/灰白色	肥前
	138 磁器 碗	2区	底径	3.6	(4.0)		施釉	施釉	灰白色/灰白色	肥前
	139 磁器 端反碗	2区	口径	10.4	6.0		施釉	施釉	白色/白色	肥前
	140 磁器 端反碗	2区	口径	(10.3)	5.2		施釉	施釉	灰白色/灰白色	肥前型紙模絵、近代
	141 青磁 皿	2区	口径	12.8	3.8		施釉・露胎	施釉	オリーブ灰色/ オリーブ灰色	輪花皿底面黒書「永口 屋」
	142 磁器 皿	2区	口径	(9.4)	2.2		施釉	施釉	灰白色/灰白色	瀬戸美濃
	143 磁器 皿	2区	口径	(10.8)	1.8		施釉	施釉	灰白色/灰白色	瀬戸美濃
	144 磁器 鉢	2区	口径	17.6	5.2		施釉	施釉	淡緑白色/淡緑白色	美濃「寛217の統制記号」
	145 磁器 染付皿	2区	底径	(14.8)	(3.5)		施釉	施釉	灰白色/灰白色	肥前「成化年製」銘款
第41区	151 ガラス器 瓶	2区	口径	2.0	5.6		型成形	型成形	緑褐色/緑褐色	
	153 土器器 砲塔	3区	口径	(43.5)	(8.9)		ヨコナデ・未調整	ヨコナデ	におい褐色/におい褐色	
第42区	154 瓦質土器 砲塔	3区			(4.5)		ヨコナデ・未調整	ヨコナデ	暗灰褐色/暗灰褐色	
	155 陶器 甕	3区	口径	(17.6)	(18.6)		タタキ→ナデ・ ヨコナデ	タタキ→ナデ	暗茶褐色/暗茶褐色	
	156 陶器 摺鉢	3区	底径	(11.8)	(7.0)		ヨコナデ・施釉	ナデ・摺目	茶褐色・暗茶褐色/ 暗茶褐色	肥前
	157 磁器 碗	3区	口径	(8.4)	2.9		施釉	施釉	白色/白色	肥前
	158 磁器 端反碗	3区	口径	(10.4)	5.8		施釉	施釉	淡青白色/灰白色	肥前
	159 磁器 小杯	3区	口径	5.0	1.7		施釉	施釉	白色/白色	近代内面付着物
	160 磁器 小杯	3区	口径	6.8	2.8		施釉	施釉	白色/白色	近代

第6表 第2次調査瓦類観察表

挿図番号	種類	出土地点	法量 (cm)						備考
第31図	111 軒平瓦	1区	長さ	4.0	幅	(136)	厚さ	16	
	112 宝珠	1区	長さ	7.8	幅	7.2	厚さ	5.0	接合面に工具痕
第32図	113 丸瓦	1区	長さ	25.4	幅	10.2	厚さ	1.8	
	114 平瓦	1区	長さ	28.4	幅	(16.3)	厚さ	1.6	刻印「引合」
第33図	115 平瓦	1区	長さ	(14.2)	幅	(14.1)	厚さ	1.6	刻印「神」
	116 平瓦	1区	長さ	(15.4)	幅	(14.8)	厚さ	1.6	凸面条線文
第34図	117 棧瓦	1区	長さ	(19.5)	幅	(18.9)	厚さ	1.6	刻印「相阪」
	118 棧瓦	1区	長さ	28.6	幅	(19.3)	厚さ	1.6	刻印「相阪」
第35図	119 棧瓦	1区	長さ	27.1	幅	27.8	厚さ	1.8	刻印「相阪」
	120 棧瓦	1区	長さ	(11.5)	幅	(18.9)	厚さ	1.8	刻印「相阪」
第36図	121 棧瓦	1区	長さ	(10.0)	幅	(8.5)	厚さ	1.7	不明刻印あり
	122 棧瓦	1区	長さ	(18.0)	幅	(8.4)	厚さ	1.6	刻印「細口」
第37図	123 棧瓦	1区	長さ	(18.0)	幅	(15.1)	厚さ	2.1	刻印「引合」
	124 棧瓦	1区	長さ	(20.3)	幅	(14.5)	厚さ	1.8	刻印「永」、凹面セメント付着
第38図	125 棧瓦	1区	長さ	(9.0)	幅	(12.0)	厚さ	1.9	刻印「永」
	126 棧瓦	1区	長さ	(19.2)	幅	(17.3)	厚さ	1.9	刻印「永」
第39図	127 棧瓦	1区	長さ	(14.2)	幅	(18.5)	厚さ	1.9	刻印「上」
	128 棧瓦	1区	長さ	(15.8)	幅	(12.7)	厚さ	1.8	「口」製のエンボス
第40図	146 丸瓦	2区	長さ	22.2	幅	13.4	厚さ	2.2	
第41図	147 角伏間瓦	2区	長さ	(32.3)	幅	28.7	厚さ	2.1	輪が二段
第42図	148 袖瓦	2区	長さ	19.7	幅	10.4	厚さ	1.6~1.9	
第43図	163 軒平瓦	3区	長さ	(13.3)	幅	4.8	厚さ	1.6	
	164 平瓦	3区	長さ	24.0	幅	(12.6)	厚さ	1.7	凹面条線文

第7表 第2次調査土製品観察表

挿図番号	器種	出土地点	法量 (cm)				重量 (g)	素材	備考
第37図	130 馬形土人形	1区	長さ	2.6	幅	3.5	厚さ	1.0	33 土 滑石粉含む
第41図	149 管状土鍾	2区	長さ	4.9	幅	2.4	厚さ	2.3	23.4 土
第42図	161 白磁 水滴	3区	長さ	(6.3)	幅	(5.4)	厚さ	2.6	陶石 穿孔あり、背面布目痕
	162 白磁 水滴	3区	長さ	(5.8)	幅	(3.2)	厚さ	3.1	陶石 穿孔あり、背面布目痕

第8表 第2次調査石製品観察表

挿図番号	器種	出土地点	法量 (cm)				重量 (g)	素材	備考
第41図	150 砥石	2区	長さ	13.0	幅	4.3	厚さ	1.4	116.1 結晶片岩
第43図	165 硯	3区	長さ	(6.5)	幅	4.5	厚さ	0.8~1.1	42.8 粘板岩 表面墨痕
	167 加工石材	3区	長さ	(16.5)	幅	(12.8)	厚さ	4.9	821.9 凝灰岩 表面ノミ痕
第44図	168 加工石材	3区	長さ	27.3	幅	20.9	厚さ	10.0	4500.0 凝灰岩 左側面ノミ痕
	169 加工石材	3区	長さ	60.9	幅	40.1	厚さ	29.2	- 凝灰岩 ノミ痕

第9表 第2次調査金属製品観察表

挿図番号	器種	出土地点	寸法 (cm)						重量 (g)	材質	備考
第37図	129 板状鉄製品	1区	長さ	(2.5)	幅	4.1	厚さ	0.4	7.3	鉄	
第41図	152 寛永通寶	2区	長さ	2.1	幅	2.1	厚さ		1.8	銅	新寛永
第43図	166 小刀	3区	長さ	(15.8)	幅	2.2	厚さ	0.2	53.0	鉄	刃先欠損

第10表 第3次調査土器・陶磁器・ガラス器観察表

挿図番号	器種	出土地点	法量 (cm)		器面調整		色調 (外面/内面)	備考
			直径	器高	外面	内面		
第51図	170 土器 埴鉢	1区		(9.3)	ナデ・指オサエ・沈線	ナデ	橙褐色/橙褐色	煮後・丸山焼か
	171 瓦質土器 鉢	1区	口径 (36.8)	(7.9)	ヨコナデ	ナデ→ヘラミガキ	暗褐色/暗灰褐色	
	172 陶器 碗	1区	底径 5.2	(3.5)	ヨコナデ・施軸	施軸	灰白色/灰白色	長門・萩焼
	173 陶器 鉢	1区	底径 8.4	(6.1)	回転ヘラクスリ・施軸・露胎	施軸	暗紫褐色/暗紫褐色	
	174 陶器 行平鍋把手	1区		(5.3)	施軸	施軸・露胎	浅黄色/浅黄色	関西系
	175 陶器 行平鍋	3-1区		(7.0)	施軸・露胎	施軸	浅黄褐色/浅黄褐色	関西系
	176 陶器 摺鉢	1区		(5.9)	ヨコナデ・ケズリ→ナデ	ヨコナデ・摺目	橙色/橙色	和泉・堺
	177 陶器 瓶	3-1区	底径 7.8	(4.7)	施軸・露胎	施軸	灰白色/暗灰褐色	長門・萩焼底面刻印「□比」
	178 磁器 紅碗	1区	口径 (6.7)	3.3	施軸	施軸	灰白色/灰白色	肥前
	179 磁器 碗	1区	口径 (7.4)	(3.8)	施軸	施軸	灰白色/灰白色	瀬戸美濃
	180 磁器 端反碗	1区	口径 (8.5)	4.1	施軸	施軸	灰白色/灰白色	瀬戸美濃
	181 磁器 端反碗	1区	口径 (8.4)	3.5	施軸	施軸	灰白色/灰白色	瀬戸美濃
	182 磁器 端反碗蓋	1区	口径 9.3	2.6	施軸	施軸	灰白色/灰白色	
	183 磁器 蕎麦粥口	1区	底径 4.6	(4.1)	施軸	施軸	灰白色/灰白色	肥前
	184 磁器 鉢	1区		(4.4)	施軸	施軸	灰白色/灰白色	肥前焼継直あり
	185 磁器 湯呑み碗	1区	口径 (7.8)	4.0	施軸	施軸	白色/白色	
	186 磁器 皿	1区	口径 (13.0)	3.7	施軸	施軸	灰白色/灰白色	型紙摺絵、近代輪花皿
第52図	187 磁器 皿	1区	口径 (16.4)	3.3	施軸	施軸	灰白色/灰白色	型紙摺絵、近代高台内格子状摺絵
第53図	193 ガラス器 瓶	1区	口径 1.7	5.9	型成形	型成形	透明/透明	底面「8」「□」のエンボス
	194 ガラス器 ビール瓶	2区	口径 (2.4)	23.4	型成形	型成形	透明/透明	肩部「BNK」、底部直上「日本麦酒株式会社製造」、底面「S NB 6」のエンボス

第11表 第3次調査瓦類観察表

挿図番号	器種	出土地点	法量 (cm)						備考
第52図	188 平瓦	1区	長さ	23.4	幅	(13.5)	厚さ	1.2	
	189 棧瓦	1区	長さ	(13.9)	幅	(9.1)	厚さ	1.6	刻印「日□」
第53図	190 棧瓦	1区	長さ	(24.6)	幅	23.0	厚さ	1.7	

第12表 第3次調査土製品観察表

挿図番号	器種	法量 (cm)	重量 (g)	素材	備考
第53図	191 磁器 戸車	長さ 5.1 幅 5.1 厚さ 1.1	45.6	陶石	

第13表 第3次調査石製品観察表

挿図番号	器種	出土地点	法量 (cm)				重さ (g)	素材	備考
第53図	192 砥石	1区	長さ (13.1)	幅 5.7	厚さ 2.1	310.7	粘板岩		
第54図	195 加工石材	1区	長さ (31.8)	幅 (39.4)	厚さ 14.6	11000.0	凝灰岩		

第6章 総括

第1節 戸室石丁場跡の採石年代と採石の体制

戸室石丁場跡の第1～3次発掘調査では、白杵藩稲葉家の家紋刻印や年号・地名・人名等を示ささまざまな刻銘が確認された。白杵城下にほど近い場所での石丁場跡の発見は重要な成果といえるが、石丁場に関する史料や伝承に乏しく、その実態は必ずしも明瞭ではない。白杵藩の記録をまとめた「白杵田貫記」の「伝御領分高頭仕分御帳目録之写」の中に、「武石式斗五升七合式 戸室村／内／（略）／三斗三升六合式 石割場荒地」とあり、この石割場荒地が戸室石丁場のことである可能性が高い²⁾。以下、遺跡に残された刻印・刻銘から、戸室石丁場跡における採石について検討する。

まず、採石の年代である。第1次調査と第3次調査では年号を示す刻銘が確認されており、それが採石年代を示すものである可能性が高い。第1次調査では「文化十二年」（1815）、第3次調査では「明治二年」（1869）の刻銘が認められる。また、第1次・第3次調査それぞれで、その刻銘よりも一段階古いとみられる刻銘も存在し、複数時期にわたる採石が想定される。第1次調査では、文化十二年銘の右下で、「亥／二月／□」の痕跡的な刻銘が認められる。「亥」は干支を示すものとみられ、もう1次は不明瞭ながら字体から「己」・「乙」・「丁」ではなく、「辛」もしくは「癸」の可能性が高い。文化十二年以前でこれに該当する亥年としては、慶長16（1611・辛亥）・元和9（1623・癸亥）・寛文11（1671・辛亥）・天和3（1683・癸亥）・享保16（1731・辛亥）・寛保3（1743・癸亥）・寛政3（1791・辛亥）・享和3（1803・癸亥）が挙げられる。本書の報告対象ではないが、第4・5次調査では「延寶六年」（1678）の刻銘を確認しており、これが確認された紀年銘では最も古い。書体も丁寧で、これが戸室石丁場跡の初源である可能性が高い。従って、延寶6年から文化12年の間が対象となるが、一定年数ごとに採石場所が動くと考えれば、文化12年に近い方の寛政3年か享和3年が可能性としては高からう。

また、第3次調査においても、「源治／四」の刻銘が認められる。第5章でも触れたが、この刻銘は字体が太いことが特徴で、こうした太い明瞭な刻字は年号以外に見られないことから、これも年号を示すものの可能性が高い。「源治」という年号は存在しないが、「源」が同音異字であるなら「元治」の可能性が考えられる。元治2年4月には慶応に改元するため、元治元年（1864）の可能性が高い。また、明治二年の刻銘の右側にも一段階古いとみられる「仰／□志垣」の銘がある。これについては年代的掛かりがないが、「源治／四」とは場所が離れているため、また別の時期の可能性も考えられるが、その場合は3時期にわたる採石ということになる。以上の点から、文化12年頃には第1次調査1区、元治元年から明治2年頃には第3次調査区回りという具合に、一定期間ごとに場所を変えながら採石を行っていたとみられる。

次に採石を行った主体である。壁面に白杵藩稲葉家の家紋を持つことから、藩の公用に用いる石材を供給した「御用丁場」とみてよからう。従って採石の主体は白杵藩ということになるが、採石に実際に請け負ったのは「村」とみられる。第1次調査では「戸室」や「戸室村」をはじめ、「戸／一」（戸室村と市浜村の頭文字か）の刻銘が、第3次調査では「戸室村／世話人／佐介／家紋刻印」、「戸室小庄ヤ 忠六／市 同 加兵衛／同 吉兵衛」、「市石 米三」（市浜村の石工か）等の刻銘が見られる。第3次調査は具体的な情報に豊富であるが、これが全て同時期であるとは限らないため注意が必要である。刻銘の位置関係や彫りの特徴から、「明治二年」と「市石 米三」、「源治／四」と「戸室小庄ヤ 忠六…」の刻銘が同時期の可能性が高い。「戸室村／世話人／佐介」は明治二年と同時期の可能性もあるが、彫りがやや不明瞭であり、「仰／□志垣」に伴う可能性もある。世話人の佐介は三字文を欠くものの稲葉家家紋刻印を伴っており、庄屋として藩の命を受けて採石を差配した総責任者とみてよからう。戸室と市浜の小庄屋は、やはり現場責任者の可能性もあるが、世話人と同時期であるなら、その下の現場監督という役割にならう。石工の米三は技術者として指導的役割を果たしたとみられる。こうした体制の下で、村人が実際の労働に従事したとみられる。紀年銘からは文化十二年や「亥年」が2月、明治二年や源治が4月であることから、採石時期は農閑期を選んでいるものとみられる。

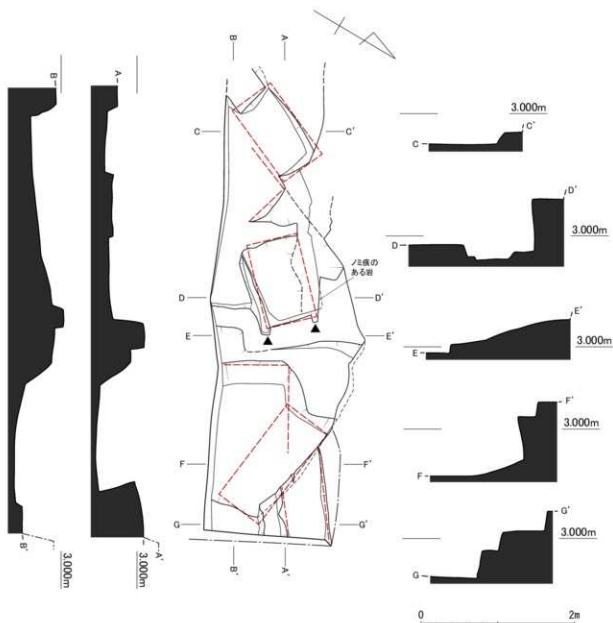
こうした刻印・刻銘を壁面に刻す意味は、やはり白杵藩の御用丁場であり、民間需要への勝手な採石が制限されていたためであろう。そのため、採石のたびに、採石の時期や採石の責任者、時期等を記録したものとみられる。壁面に刻銘を刻む例としては、大分県内では日田市法恩寺石切場跡が挙げられる。18世紀後半～近代初頭頃の操業とみられ、壁

2) これについては神田高士氏が指摘している（神田前掲註1）。

面に「双」や「双連」の刻銘が認められる。「双連」は近世の双連村を表すもので、村が採石を行ったという意味か、あるいは村の入会地としての所有権を示したものの可能性がある³⁾。法恩寺石切場跡では刻印は認められないが、当時の双連村は幕府領で西国郡代筋に属していたためであろう。ここでの採石目的は不明であるが、戸室石丁場跡と同様に、西国郡代筋の命を受け、村が採石を担った可能性は十分に考えられる。

第2節 戸室石丁場跡での石材採取とその用途について

次に、戸室石丁場跡から採取された石材について、その採取方法と用途について検討する。戸室石丁場跡では、壁面に残された矢穴に乏しく、明確な採石痕跡としては凝灰岩岩盤の階段状の落込み程度である。第1次調査1区では、矢穴列が見られるが、その形態は矢穴というよりは楔に近い。また、この側に現代の配管を通しており、この配管を設置するために岩盤を調整した可能性もあり、確実に近世の遺構であるとは言い切れない点は注意が必要である。



第55図 第3次調査2区の採石痕跡（1/50）

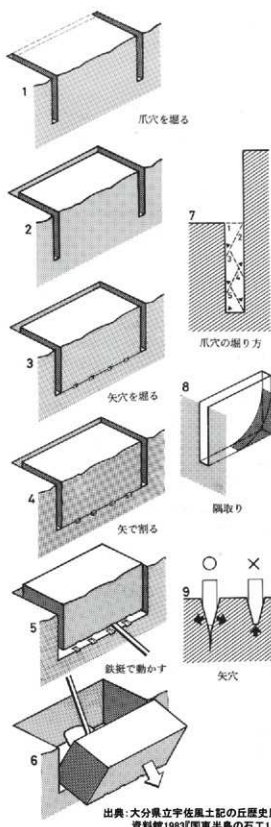
3) 横澤 悠2023「法恩寺石切場跡－法恩寺地区急傾斜地崩壊対策事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－」大分県立埋蔵文化財センター調査報告書第26集、大分県立埋蔵文化財センター。

岩盤面に残された階段状の落ち込みは、第3次調査2区を基に検討したい(第55図)。2区では落ち込みの平面形状がいずれも方形を基調としている。注目すべきはD断面で、落ち込みの南北両側の東端部が東辺よりも張り出している(第55図中の▲)。これは岩盤にあらかじめ切り出す大きさを決めて溝を掘った痕跡とみられる。こうした採石方法を溝切技法といい、凝灰岩や滑石のような比較的軟質の石材に用いられ⁴⁾、必要とする石材の三方に溝を切り、底辺に楔(矢)を打ち込んで母岩から切り離す方法である(第56図)。第1次調査2区で検出された溝状遺構SD1も、溝切技法の痕跡の可能性もあろう。また、第1次調査1区の刻印I2上には、横方向の亀裂に所々楔痕のようなものが見られ、これも溝切技法の痕跡の可能性が考えられる(第57図)。

第3次調査2区では、溝切技法によって採取された石材は、C断面では長さ約1.1m×幅0.6m(高さはそのあとの採石によるものか不明)、D断面では長さ約1.1m×幅0.8m×高さ0.7m程度、F断面では長さ約1.4m×幅0.6m×高さ0.6mほどの大きさに復元されよう。溝切技法により方柱状の石材を採取した後の細かい調整を行う細工丁場は不明である。採石した石材をその場で加工し、製品を現場へ運んだのか、あるいは現場で細工を行ったかのいずれかであるが、後述のように石垣普請による採石の場合、石材の噛み合わせをその場で調整する必要があるため、後者の可能性が考えられよう。

採石した石材の用途であるが、第3次調査では「仰ノ□志垣」(刻2)の刻銘が目立されよう。一字不明であるが、意味を勘案すれば「石垣」がまず考えられる。不明字もその形から「み」の可能性があろう。ただし、その前の「仰ノ」については具体的にどこを示すものか不明である。用途としては石垣普請に伴う石材採取ということになる。

また、第3次調査で確認された「納/懸/米」の刻銘(刻6)は、文字どおり税としての「懸米」を納めた、意であるが、通常の納税を記す必要があるとは思えない。あえて記すということは、懸米を石で納めるために採石を行ったということになろう。戸室石丁場が藩の御用丁場であれば村が勝手に採石することはできないため、そこには藩の指示があったと思われる。この推定が正しければ、石垣構築のような明確な用途を定めない石材の採取も行われていたことになる。この採石時期は明治2年以前としか言えないが、藩の税務記録から特定できる可能性があり、その検討は今後の課題としておきたい。



出典：大分県立宇佐歴史民俗資料館1983『国東半島の石工Ⅰ』

第56図 溝切技法

4) 金子浩之2015『石と考古学』『石造文化財』7、石造文化財調査研究所



※写真は縮尺任意



第57図 第1次調査1区刻印12上の溝切技法の痕跡（1／20）

第3節 遺跡の評価

以上、前節までに総括した内容を踏まえ、戸室石丁場跡の評価を以下に記す。

- ①戸室石丁場跡は臼杵藩稲葉家の家紋を持つ石丁場跡で、藩の御用丁場とみられる。家紋を刻すことで民間需要への勝手な採石を制限していた可能性が高い。
- ②稲葉家家紋刻印とともに、「文化十二年」や「明治二年」等の紀年銘から、採石時期を特定できる重要な遺跡である。
- ③第4・5次調査（未報告）では延寶6年（1678）の紀年銘を確認しており、17世紀後半～19世紀後半にかけて断続的に採石を行っている。
- ④採石は藩の命を受けて村が請け負い、世話人（大庄屋）が総責任者となっており行っている。また、小庄屋や石工の名前の刻銘もあり、現場監督や技術指導等で関与した人々の名前であるとみられる。
- ⑤戸室石丁場跡での採石は溝切技法で方柱状の石材を切り出している。
- ⑥採石は石垣普請によるとみられるものの他、「納懸米」の刻銘から税を石で納めるために採石した可能性がある。
- ⑦確認された刻印・刻銘については、一部を除きその範囲を不施工とすることで現状保存を図った。

添付DVDについて

- 1 巻末添付のDVDには、戸室石丁場跡第1～3次調査の調査記録（三次元オルソ画像、調査写真、刻印・刻銘拓影、遺物写真）を収録しています。
- 2 収録したデータの著作権は大分県教育委員会に帰属します。刊行物その他で所収データを使用する場合は、大分県立埋蔵文化財センターに申請しその許可を得たうえで使用してください。
- 3 フォルダ及びデータ構成は以下のとおりです。



写 真 图 版



第1次調査1区調査地全景



第1次調査1A区調査地全景



第1次調査2・3区調査地全景



第1次調査4区全景



第1次調査三次元測量実施状況



第1次調査刻印等記録調査状況



第1次調査刻印等拓本採取状況



第1次調査刻印・「文化十二年」刻銘等



第1次調査刻印・刻銘1・2



第1次調査刻印6・7



第1次調査刻銘3



第1次調査刻銘5



第1次調査刻銘9



第1次調査刻銘8



第1次調査刻印12



第1次調査矢穴列



第1次調査1A区全景（南から）



第1次調査1A区全景（北から）



第1次調査1A区土層断面



第1次調査1A区祠状遺構



第1次調査2区南側全景



第1次調査2区北側全景



第1次調査2区SD1



第1次調査2区土層及びSX2



第15图1



第15图6



第17图27



第17图28



第15图4



第15图6



第18图37



第18图38



第19图39



第19图41



第19图42



第19图46



第19图47



第19图48



第19图51



第19图52



第19图53



第20图67



第21图70



第22图76



第22图77



第23图79



第23图82



第23图80



第23图81



第23图83



第24图89



第2次調査地全景



第2次調査地壁面



第2次調査刻印



第2次調査1区全景



第2次調査1区池跡



第2次調査2区全景



第2次調査3区全景



第2次調査3区岩盤壁面



第30图94



第30图95



第30图99



第31图109



第31图110



第31图111



第31图112



第32图113



第32图114



第33图116



第34图119



第37图130



第38图135



第38图139



第38图141



第40图147



第38图140



第39图145



第38图141



第41图148



第41图150



第41图152



第42图153



第42图158



第42图161



第43图163



第43图164



第43图165



第3次調査地全景



第3次調査刻印・刻銘箇所



第3次調査刻印・刻銘2・3



第3次調査刻印・刻銘4



第3次調査刻印・刻銘6・7



第3次調査刻銘5



第3次調査刻銘8



第3次調査刻銘9



第3次調査1区全景



第3次調査2区全景



第3次調査2区段状切り出し面



第3次調査2区岩盤表面のノミ痕



第51図170



|



第51図178



第51図182



第51図172



第51図177



第51図180



第51図185



|



第52図186



第53図191



第53図192



第52図187



第53図190



第53図194



第54図195

報告書抄録

ふりがな	とむろいしちょうばあと
書名	戸室石丁場跡 1
副書名	双葉南地区急傾斜地崩壊対策事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	1
シリーズ名	大分県立埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第 31 集
編著者名	横澤 慈
編集機関	大分県立埋蔵文化財センター
所在地	〒 870-0152 大分市牧緑町 1 番 61 号 TEL 097-552-0077
発行年月日	西暦 2025 年 3 月 31 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ° °	東経 ° ° °	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
とむろいしちょうばあと 戸室石丁場跡	うすきしおおあざ とむろあざくは・ じょうこうじ 臼杵市大字戸 室字久保・浄 光寺	44206	206222				108.5㎡	双葉南地区急傾斜 地崩壊対策事業
(第 1 次調査)				33°7'13"	131°47'18"	2019.12.9 ～ 2020.3.6	69.6㎡	
(第 2 次調査)				33°7'14"	131°47'19"	2020.11.30 ～ 2021.3.24	24.2㎡	
(第 3 次調査)				33°7'15"	131°47'19"	2021.9.27 ～ 2021.10.13	14.7㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
戸室石丁場跡	生産	近世～近代	刻印・刻銘、矢 穴列、祠跡、石 切痕跡	土師器、瓦質土器、陶 磁器、瓦、銭貨、土製品、 砥石、硯、ガラス瓶	臼杵藩稲葉家の家紋刻印、文化 十二年・明治二年の銘を持つ石丁 場跡

要 約	戸室石丁場跡の発掘調査は双葉南地区急傾斜地崩壊対策事業に伴い実施した。 遺跡は臼杵市西方の水ヶ城山から東へ派生する台地状地形南縁の溶結凝灰岩露頭にある。確認された主たる遺構は、臼杵藩稲葉家の家紋「隅切折敷三字文」の刻印や「文化十二年」・「明治二年」等の年代を示す刻銘、石材切り出しに関わったとみられる「戸室村」やその責任者である庄屋、石工の名前等の刻銘がある。また、発掘調査では石材を切り出した痕跡とみられる段状の岩盤面も確認された。臼杵藩稲葉家の家紋刻印を持つことから藩の公的な石丁場であるとみられ、紀年銘から採石時期が把握できる重要な遺跡である。刻印・刻銘の一部は、確認された範囲を中心に部分的に不施工とすることで現状保存を図った。
-----	--

大分県立埋蔵文化財センター調査報告書 第31集

戸室石丁場跡 1

双葉南地区急傾斜地崩壊対策事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(1)

令和7(2025)年3月31日

編集・発行 大分県立埋蔵文化財センター
〒870-0152 大分市牧緑町1番61号
TEL 097-552-0077

印刷 小野高速印刷株式会社
〒870-0913 大分市松原町2丁目1番6号
TEL 097-558-3444
